町民参加の町史づくり

竹富町史だより

2001・9・28
第２０号

竹富町史編集室

沖縄県石垣市美崎町２番地
TEL・FAX兼用(09808)2-9985

目次

第四回ばいぬ島写真展……1
八重山地域史協議会総会……2
沖縄県地域史協議会研修会……2
写真にみるわが町
▽上地島―集落と民家……3
新聞で知る町の今昔
▽戦後の分村問題……4
文化財探訪
▽古見赤崎スラ所……5
聖地めぐり
▽照後御嶽……6
『鉄田義司日記』補遺……7
収蔵図書紹介……55
業務日誌……59
編集後記……62

●表紙の写真●

竹富島の伝統的な織物、ミンサーを仕上げる島の婦人たちである。作業工程は数多くあるが、婦人らがやっているのは経糸を巻き取る作業だ。絣がずれないように、気を配りながら平均的に巻き込んでいく。絣ごとハタ草を入れることで弛みをなくすことができる。ミンサーは木綿を材料をした、平織りの細帯のことである。近年、ミンサー独特な図柄である、四つ玉、五つ玉の柄を入れ込んだ、アレンジ品が観光客の人気を博している。

☆題字　大　城　正　明

写真132点を展示し、好評を博した「ぱいぬ島写真展」

第四回ぱいぬ島写真展

―第五回ぱいぬ島まつりで好評博す―

「新世紀　南の島が七色に輝く！」をテーマに掲げた「第五回ぱいぬ島まつり」（主催・同まつり実行委員会）が八月二十四日二十五日の両日、西表島東部の大原にある町離島振興総合センターで開催され、町内をはじめ町外からも多くの人々が詰め掛け賑わいました。今回で第四回目を数える「ぱいぬ島写真展」（主管・町史編集室）は、まつりの一翼を担い、好評を博しました。写真展の参観者は延べ八百人余にも達し、写真を通じて古い時代の竹富町の姿に思いを馳せていました。

写真は時代のひとコマを映し出し、歴史、文化、人生のドラマやロマンが凝縮されており、見る人に感動を与えます。今回、展示した写真は、別巻3写真集『ぱいぬしまじま』を編集するために収集したもの、それに今後、発刊予定の「島じま編」に掲載するものの中から百三十二点を精選しました。その中には、沖縄県公文書館が所蔵し、町史編集室がプリント化したＵＳＣＡＲ（琉球列島民政府）の写真を数点、展示しました。

写真は各島ごとに選び出し、展示しましたが、村の風景、まつり、暮らし、学校などに特徴があり、それぞれに独自性がありました。数十年前までは数多かったが、今では数が少なくなっている干立のヤエヤマヤシ群落、仲間―野原間を結んだオグデン道路波照間島の燐鉱採掘、小浜島の八重山鰹節製造所など…。中には元気だった村の知名士の顔を見付け、感慨深く参観する人もいました。会場では町史編集室がこれまで発刊した町史を並べて販売し、人気を集めました。

八重山地域史協議会総会

―鹿川村跡の廃村調査を計画

八重山地域史協議会（安里碩八代表）の二〇〇一年度定期総会が五月二五日、町教育委員会、町農業委員会、町史編集室合同会議室で開かれました。総会では二〇〇〇年度活動および会計報告のほか二〇〇一年度活動計画、活動予算案が審議され、原案どおり可決されました。活動事業として、今年度は鹿川村跡の廃村調査を計画しております。

八地協は、八重山地域史研究に関する情報および資料の交換と、関係職員の親睦を図ることを目的に一九九七年十二月石垣市史、竹富町史、与那国町史の関係機関によって発足。これまで高那村跡、崎山村跡の廃村調査等を実施し、大きな成果を上げてきました。

総会では議案審議に先立ち、安里代表が「これまで竹富町を中心に史跡を調査して来ました。今年度は鹿川村跡の調査を予定しております。」とあいさつ。二〇〇〇年度活動計画を皮切りに、議案の審議に入りました。

今年度の事業計画は、十月中旬に西表島南部にある、鹿川村跡の現地踏査を中心に据えています。同村跡については昨年九月に、竹富町史編集室が町史第十巻資料編「近代②」の編集、発刊に向けて現地調査を実施しました。今回の調査はこれらの調査の成果を踏まえて実施することになります。この他に八重山歴史年表作成への着手、研修会報告書の発行等を見込んでいます。

総会では任期満了（一年）に伴い、役員改選が行われました。（次は新役員）◇代表・安里碩八（竹富町史編集室長）◇運営委員・黒島為一（石垣市史編集課長）、米城恵（与那国町史編纂事務局）◇書記会計・通事孝作（竹富町史編集室主事）◇監査役・松村順一（石垣市史編集課長補佐）

沖縄県地域史協議会研修会

―具志頭村で開催―

沖縄県地域史協議会（外間政明代表）は六月一日、具志頭村立歴史民俗資料館で、二〇〇一年度第一回研修会を開きました。今回の研修テーマは「平成十二年度の刊行物について」。具志頭村立歴史民俗資料館の玉城毅氏が「具志頭村立歴史民俗資料館の設立について」、那覇市歴史資料室の宮城晴美さんが「那覇女性史編さんを終えるにあたって」、名護市史編さん室の中鉢良護氏が『名護市史編9民俗Ⅰ・Ⅱ』について」と題し、報告しました。

玉城氏は民俗資料館の設立準備から開館までの過程を、同館の特徴を交えながら発表。宮城さんは「前近代編」「近代編」「戦後編」の三冊にわたる女性史を発刊した意義を強調。中鉢氏は、他市町村史とは異なる、名護市史の民俗編の編集方法を説いた。三者とも興味深く、多くの示唆を与えました。

石垣囲いの屋敷と赤瓦屋根の民家

〈写真に見るわが町〉20

上地島―集落と民家

西表島の東方海上に浮かぶ新城島のひとつ、上地島に建つ立派な民家である。一九三七年（昭和一二年）に島を訪れた大島廣氏が撮影した。島は今では四世帯、五人が住み、学校もない往時の活力を失った村に様替わりしているが、琉球王府時代の一七〇〇年代には人口四百人を超える、活気のある集落だった。

上地島は正保年間（一六四四年～一六四七年）に作成された、『宮古八重山両島絵図帳』には「黒島之内」の「上離島」と記され、黒島村の一部を構成する行政区域であることが分かる。三間切制の時には石垣間切に組み入れられている。村番所は一六八四年（康熙二三）に下地村（下離島）から移転して以来、明治中期に廃止になるまでずっと置かれた。

島の住民が暮らしていくには、生活用水の確保に並々ならぬ苦労があり、雨水を貯めて飲料水としていた。生活の基盤は農業で島人らは刳舟を操り、対岸の西表島まで繰り出し、稲作の通耕を行なっていた。学校は一八九六年（明治二九）に新城尋常小学校が創立したことに始まる。しかし、一九七五年（昭和五〇）、当時の上地小学校が廃校になり、学校教育が途絶えた。

下地島を含めた新城島の一九三五年（同一〇）の人口は四六二人。これから察して上地島の人口は、恐らく二百人を超えたであろう。島の民家が撮影された昭和一二年前後の村の状況を知る手立ては薄いが、昭和一四年には共同販売店が開設されている。それにしても立派な赤瓦屋根の木造建物である。屋敷囲いには琉球石灰岩の石垣が配され、屋敷の中には目隠しのヒンプンが建つ。住人は知らないが、典型的な沖縄型民家である。

《新聞で知る町の今昔》15

戦後の分村問題

竹富町の分村問題については、『町史だより第2号』の本シリーズで取り上げたが、本号では戦後再び惹起した同問題に絞って追究してみたい。分村問題が戦後、新聞に登場するのは一九四九年（昭和二四）のこと。『南西新報』が七月三日付け紙面で「竹富町　分村を考慮か」と、見出しで記事にしたことに始まる。

「仄聞する所によれば、竹富町では分村を考慮中のようで、その一試案として左の通り六ケ村が考えられ、町長はこの問題に関し目下研究を進めており、近日発表する模様である」と綴る。ただ、「仄聞」とあることから、確かな取材をしての記事なのかはっきりしない。記事は具体的に竹富村（竹富）、黒島村（黒島、上地、下地）波照間村（波照間）、小浜村（小浜）、西表村（西部西表）、鳩間、東表村（東部西表）と具体的に示す。さらに、『南西新報』九月六日付け紙面に「竹富町分村問題」との主見出しの記事が出る。内容は「分村にもっとも熱心なのは祖納部落」としたうえで、有志が会合をもったが、賛否両論が出た。そして、町当局もまだ具体的結論を決定していない、としている。また、『自由民報』も九月六日付け紙面で「分村問題表面化？」と見出しを打ち、分村問題を記事化している。さらに『南西新報』九月十五日、十八日付け紙面には「竹富町分村問題に就いて」と題する読者の投稿を掲載している。

『自由民報』の紙面

分村問題表面化？

法廷涙に泣れる

未亡人の証言に

養殖眞珠に新しい方法

英領對日講和見透しに期待うす

久部良土地問題解決？

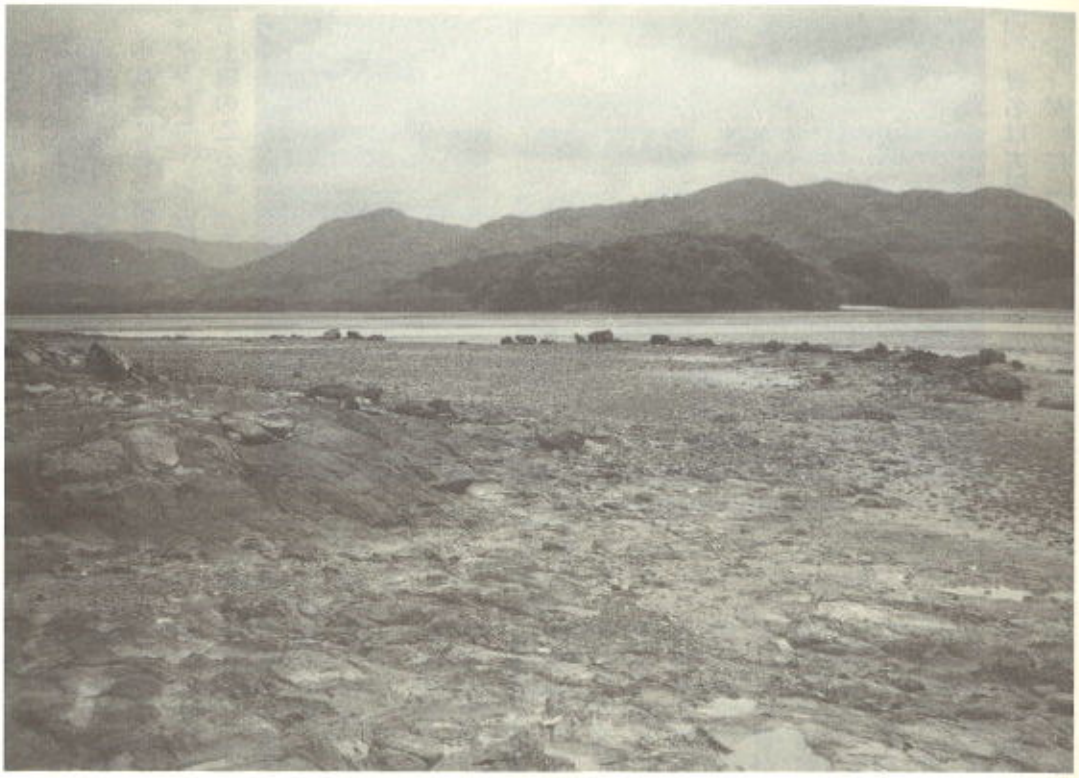
土地は賣らず

西表分村「愈々乗出す

本社賞投票

前人氣かつとう

分村問題に関して、祖納に町の分村を求める資料が残っている。一九四六年（昭和二一年）三月十二日付けで前大次郎（西表区長）、慶田城勇（鳩間区長）、東若久和利（崎山区長）の連名で宮良長詳・八重山支庁長宛の「陳情書」がそれ。「地元ニ於ケル分村ニ対スル希望益々熾烈トナリ…」と綴っている。



石積み囲い跡の残るスラ所跡。鉄滓も散在する

〈文化財深訪〉16

古見赤崎スラ所跡

西表島東部にある古見集落の東方、後良川河口に突き出た赤崎に建設された、琉球王府時代の造船所跡である。沖縄では造船所のことをスラ所という。スラ所の語源については「木の梢」説、「修羅」説、「解（す）でる」説などがある。八重山の古文書にはスラ所に関する記述が多々、見られる。

琉球王府時代には石垣島と、西表島にスラ所があり、大型定納船のほか地船などが造られていた。造船所は島間をむすぶ唯一の交通手段である、船を造る場所であることから、首里王府および八重山蔵元にとっては、重要事のひとつだった。

『参遣状』にスラ所に関する記述があるが、康熙三八年（一六九九）から、同四一年（一七〇二）にかけて、移転問題が持ちがっている。赤崎スラ所は三百尋の干潟を持ち、そのため船下ろしに日数を要し、人員も余分にかかる。そのため、かきら崎にスラ所を移したい、というのである。かきら崎は赤崎に比べ、船下ろし時間は短縮でき、費用もあまりかからない。しかし、集落から離れ過ぎる、という難点があった。この八重山蔵元の申請に対し、王府は保留したが、蔵元からの申請はその後も続いた。

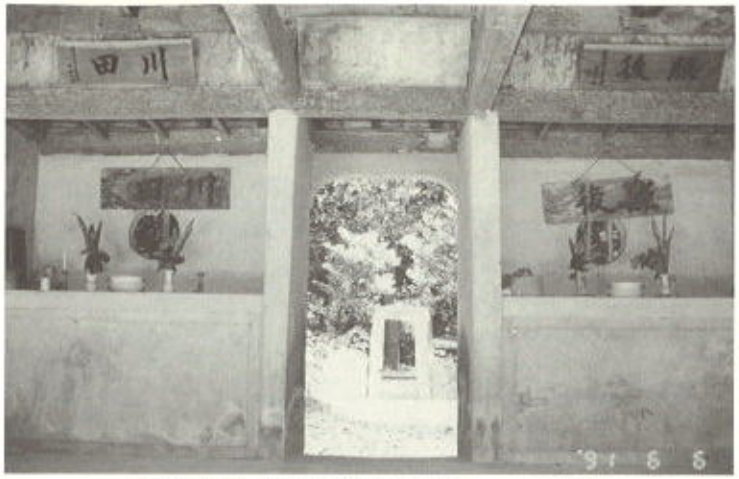
スラ所問題は、その後、『参遣状』には登場しないが、『八重山島年来記』の康熙五四年（一七一五）条に「古見勢田のすら所」、乾隆三年（一七三八）条に「古見船すら所新規ニ普請…」などと記述されていることから、古見のスラ所は何回か場所の選定が行なわれたであろう。

赤崎スラ所跡は現在、干潮時になると、沖合に干潟が広がり、かつての波消し石が弧を描いている。鉄滓も見つかっている。

〈聖地めぐり〉17

照後御嶽

小浜島にある御嶽のひとつ。島ではティダクシワーンと呼ぶ。沖縄では古くから太陽のことを「ティダ」と呼んでいるが、嶽名は太陽と関係あるのだろうか。「ティダ」に「照」の漢字を当て、「光明」と関わり、「太陽」に結び付けることには無理があるのだろうか。かつて琉球諸島には太陽崇拝があったが、今では近代的合理主義が浸透し、すっかり影をひそめてしまった。現代人は、太陽に畏敬の念を抱くことを忘れたようだが、太陽は万物に生きる力を与えてくれる。



照後御嶽と川田御嶽が合祀されている拝殿

御嶽の由来については『小浜島誌』（山城浩著）に詳しく記す。同誌をひもとくと…。

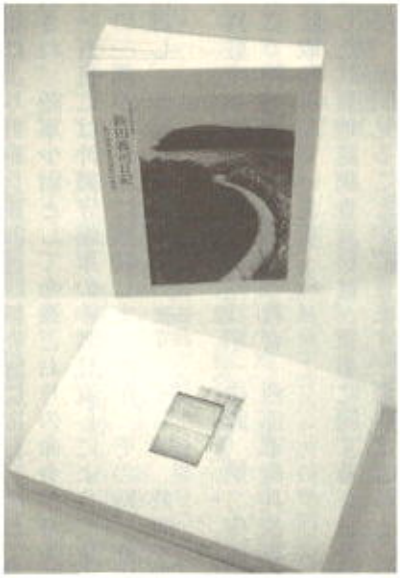
昔古見から兄妹がオーザ（大阿母）参りの旅出の途中、帆船の航海故に小浜島の北海岸に寄港し泊まることになった。ある神びょうる（神を祀る日）の日に此の場所に神の火が現れた。更には上国への旅出の節、この場所に立ち寄って祈願すると、航海は安全で、無事目的が達成されたこれらの事が王府へ上申され、ご下問になり感銘を呼んで此の地を聖地と祀るようになった。ここがユンドレスクであるが、海岸断崖の上になっている。当時、南風川田亀（俗名ウニ大主）は妹ウナリの贔屓で、首里王府と島民の間に相談上申役を務め信望が厚かったとのことである。

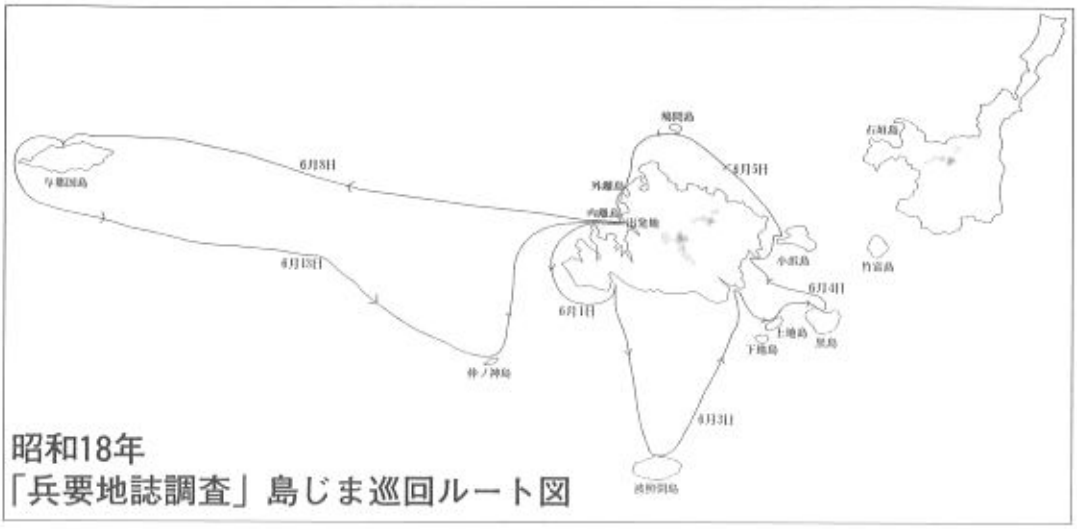
（中略）ウニ大主の友人宮立家の人が拝所を設置したので、初代神司は同家の娘がなったとのことである。このような縁を踏まえて人々の信仰を深めつつ邑人の便利を求めて、次の遷座の歴史を経て現在の西山（いりやま）の聖域が決まり、オガンの囲いの杜に相応しく土着した。

御嶽発祥の地はユンドレスク。同地は石垣が三重に積まれて神々しい。ここは雑草木が生い茂り神月の八月、村を挙げて道開きを行う場となり、村人は祈りを捧げる。御嶽は、その後、祈願する場としては難所であるため、ウティスクヤマからコウキ、そして村中近くの現在の場所へと移転している。明和の大津波（一七七一年）後、村人の一部は石垣島の宮良へ強制移住させられたが、宮良にある小浜御嶽の元御嶽で知られる。

琉球諸島の公儀御嶽を網羅した『琉球国由来記』にも載っており、神名テダクシ神花、御イベ名ナイセルコフハンフーと記す。年中祭祀の中心場であり、川田御嶽と合祀されている。嶽域は薄暗く、フクギを中心に様々な亜熱帯常緑樹が繁茂している。

『鈇田義司日記』補遺





昭和18年
「兵要地誌調査」島じま巡回ルート図

《解説》

竹富町史編集室では平成十二年度に、町史資料集①として『鉄田義司日記―船浮要塞重砲兵連隊の軌跡―』を発刊しましたが、今回、新たに鉄田氏が兵要地誌調査のため、各島じまを巡った時の「孤島をめぐりて」と題する資料をあることが分かり、補遺として取り扱うことになりました。資料は戦時中に書かれた日記を基に、戦後、鉄田氏が新たに書き改めたもので、四百字詰め原稿用紙五十八枚の分量です。先に発刊した『鉄田義司日記』と併せて読むことで、八重山における沖縄戦の一断面を知ることができると思います。

鉄田氏の軍歴については、『鉄田義司日記』で紹介しましたが、略歴をみると一九四一年（昭和一六）一〇月二日、臨時召集により野砲兵第四連隊補充隊に応召。そして、同日船浮要塞重砲兵連隊第一中隊に編入され、陸軍少尉として命課どおりの命令が与えられています。一九四四年（同一九）五月一五日には沖縄守備軍の作戦見直しにより、重砲兵連隊は重砲兵第八連隊と改称され、その一部が石垣島に移駐しましたが、その時、鉄田氏は中尉として石垣島に移り、部下を指揮し、作戦を展開しています。そして、終戦を迎えています。

船浮要塞の任務に就き、石垣島へ移駐するまでの間、重砲兵第一中隊、第二中隊の隊長として、隊員を指揮監督するとともに、陣地構築、初年兵の教育、西部軍砲兵長集合教育さらに各島じまの兵要地誌調査などに取り組んでいます。

鉄田氏が「孤島をめぐりて」と題した兵要地誌調査資料は、軍事に関することを記していないが、戦前の島じまの様子を一部、垣間見ることができます。資料によると、鉄田氏は一九四三年（同一八）六月一日、内離島を出発し、崎山を経て鹿川に至り、波照間島に到着。六月二日には島を調査して、三日に同島を離れ、西表島の南風見に渡り、そして新城島を経て、黒島に入り宿泊。四日に黒島を調査して同島を離れ、古見、小浜島に到着しています。五日には小浜島を後にして、西表島北部を回って白浜に着き、竹富村（当時）での任務を終えています。

兵要地誌調査は、六月八日には与那国島で実施。同島は遠島であることから船舶を替えて島に入り、島内を限無く調査しております。そして一三日には仲ノ神島の付近を通り、帰任しています。資料は陣中日誌とは異なり、昭和一八当時の島の実態、島人の暮らしの一部を知る民俗的な価値を有する、貴重な日記になっています。

（通事孝作）

プロローグ

『波照間島民俗誌』（宮良高弘著）の文を借用すると、次の如く書かれている。「波照間島は石垣島から南西四二㌔の外洋上に浮かぶ孤島である。唯一の定期連絡船新栄丸（五二・〇二㌧）で四時間を要し、月平均四～五回石垣港間を往復する。石垣港を出帆した船は、西表島の東部に点在している竹富島、小浜島、黒島、新城島の上地島・下地島の島々の間を縫って波照間へと進む。下地島を離れた途端に、船は太平洋のものすごいうねりに木の葉を浮べた如く揺れ始める。黒潮の流れは強く、船長によれば、潮が南東に流れるときが多く、その折りは船の舵を常に右へ右へと切らないと目的地に着くことが出来ないという。下地島近くまで来ると、南西洋上にかすかに波照間島が映る。ここから約二時間で波照間に達するのである」と記す。以上は、昭和四十七年六月二十五日発行の著書の冒頭に書かれている。

六月一日（火）

内離島を出発

私はそれより約三十年遡る昭和十八年六月一日、この波照間島を訪れた。いかに交通の途絶えた絶海の孤島であったかが想像出来ると思う。

使用した船は玉福丸（十五馬力、約七㌧）で船長の玉城君、機関長と小用の男の三名。私の随行者は当番兵の田中早夫上等兵が一人である。五日分の糧食として米・サバ缶・コンビーフと炭それに地図と海図を持った。天気は晴朗、薄い雲が少し北に流れていて、陽光は海面一杯に輝き波は眩い目射る。勿論遮光眼鏡の準備は出来ている。

朝七時十五分、内離桟橋を出港した。船浮湾口、サバ崎の突角辺りから急に波は高くなった。然し、ピッチングが大きいだけで、大海に乗り出したという壮快さが感じられた。ヨナ

内離島　西表島の西部に浮ぶ島。対岸に白浜集落があり、現在、無人島だが戦時中には船浮要塞の司令部が置かれた。さらに陸軍病院も設置されたほか、海岸近くには重砲や高射砲も設けられ、要塞の第一区として重要な役割を担った。

波照間島　西表島の南方に浮ぶ、日本最南端の有人島として知られる。石垣島、西表島及び周辺離島を含めた石西礁湖の外にあり島の海域は大海で大波がうねる。戦時中には離島残置工作員が配置され、住民は軍命により西表島の南岸、南風見に強制退去されられマラリアに罹患、多数が死亡した。また、戦闘機の不時着もあった。

船浮湾口　西表島西部の船浮湾は、白浜と内離島などに囲まれる。湾内は深海で船舶の避難港として利用される。戦時中の湾口は船舶が出入りし、監視された。

サバ崎　西表島西部の岬のひとつ。船浮と網取の間に突き出ており、沖合は三角波が立つ難所で知られる。戦時中には要塞の第四区に指定され、監視所が置かれた。

曽根の岩礁を縫って崎山湾外二差し掛った頃、トカキンと称する大きな魚二匹が釣れた。船長は「五斤以上はある」と云っている。間もなく又二匹が釣れ、出港早々の大漁である。釣りを目的で来た時には、なかなか釣れないものだが、唯船を走らせて糸を流しておくだけでこの収穫である。

崎*山村を経て、鹿川へ

崎山湾に船を停め、刳舟に移って部落に上陸したのは八時四十五分だった。ふく木、ヤラブや芭蕉の間に点在する民家を一軒宛訪ねても人影がない。やっと一人の婦人が居たが、話がさっぱり通じない。顔一面に五〜六ミリの産毛が生えていて、常人離れをしていた容貌をしていた。丁度船長が土地の人を一人連れて来てくれたので、大体事情が了解出来た。部落の人は皆稲刈りに出ている。田んぼは湾の奥のヒルギに囲まれた沢を利用する小さなものである。戸数七戸人口十人足らず、昔波照間より移住した人達の子孫だと教えられた。

船に帰って九時四十分、鹿川に向って出港した。パイミ崎を廻れば愈々、太平洋に面する荒海である。濃紺というよりも、全くの黒潮そのものズバリの表現がピッタリと来る大うねりの海面南風によって西表島の南岸にぶち当り、砕け散る偉観である。海に臨んで削り取られた断崖の上に、聳え立つ急峻な山に沿って吹き上げる海風は、高い空を行く薄雲を呼んで雲を生む。その現実を目の前に見ながら、海軍望楼の下を海岸沿いに船を進める。

丁度その時遥か南方に、雲か霞かと思われる僅か盛り上がったものが臨まれた。船長は、「波照間島です」と教えてくれた。この好天候にこの荒波、想像も及ばぬ荒波である。

ウピラ岩（石）の奇勝を左に、切り立った断崖の下を、落水崎を越えて鹿川湾に差し掛った頃、遥か東方に南風見崎を望み、西表島南岸を一望することが出来た。

玉城船長は「この荒波では鹿川湾に入れぬかも知れません」と云うので「何とか船長の技術で湾内に入って欲しい」と頼むのであったが、湾内に散在する岩礁に砕ける波の白く高く

崎山村　西表島西部の崎山湾に面した村落。一七五五年（乾隆二〇）に波照間、網取、鹿川、祖納からの寄百姓によって村立てされた。しかし、マラリア禍等によって、太平洋戦争直後には廃村となった。

崎山半島の南部にあるウピラ石。周辺海域は荒波（平成12年）

飛び散る様を眺めた時は、諦めねばならんかと思わざるを得なかった。船長の巧みな手腕は上手に船を操り、湾の一地点に静かに停船した。

鹿川上陸

昔、鹿川部落の在ったという海浜は五〇〇米ばかりの白砂の海岸をなしている。白砂といっても珊瑚礁の砕けた真白い砂である。親子の牛が悠々と歩いているのを見て、実に不思議な感に打たれたが、更に海浜の背後の山は芝草に覆われて美しい緑地をなし、同じく牛の群れが目に入った。放牧地である。船長の話では、崎山部落民が山越しにこの牧場に通うのだと云う。

更に急峻な山では時に牛が転落して死ぬ事があるのだと。又、鹿川貝の産地であるが、なかなか拾うのが難しい。先年まで只一人老人が此の所に住居して貝を集めていたが、今は崎山に戻っているとも教えてくれた。

十一時、上陸し暫し海岸を歩いて見たが、その内、田中上等兵が飯盒炊事をして、温かい白い飯とコンビーフ、更に先程の魚の刺身を準備してくれたので、木陰で非常にうまく頂いた。南の端の青い芝生の上に牛だけしか居ない、この土地で生きた魚を味わう喜び又一入であった。

十三時、乗船してクイラ川の源流を探訪し度く上陸地点を求めて船を動かしてもらったが岸辺打つ高波は折りからの干潮と共に、いかに船長の技でも叶わず下船出来なかった。高波の中を徘徊し乍ら遂に諦めて一路南へ遥か洋上に霞む二十浬離れた波照間島を目指すことにした。

黒潮の波は益々大きく荒く、ピッチングとローリングを交える。冒頭の引用文中に「木の葉を浮べた如く揺れ始めた」とある如く、それは五十二トンの船であるが、こちらは僅か七トンのポンポン船である。波に翻弄されながら船長の腕に運命を託した。強い太陽の下を進む船

クイラ川　越良川と表記されたりもする。船浮湾に注ぐ河川。戦時中、大原に強制退去させられた船浮の住民は、帰村の際、山越えをして川の上流から家財道具を運び、村へ辿り着いたという。周辺の自然環境が素晴らしい。

ローリング　船舶や航空機が進行方向に対して横に揺れること。

ピッチング　船舶や航空機が上下に揺れること。

に魚群を追うカモメが時折り美しい姿を見せてくれる。

遥か西方洋上に岩島・仲の神島が見られた。上空一点の雲もないけれど、西表島の上は白雲に覆われ積乱雲が林立している。南国特有の奇観である。斯かる大海に乗り出して初めて大自然の景を鑑賞出来るものである。

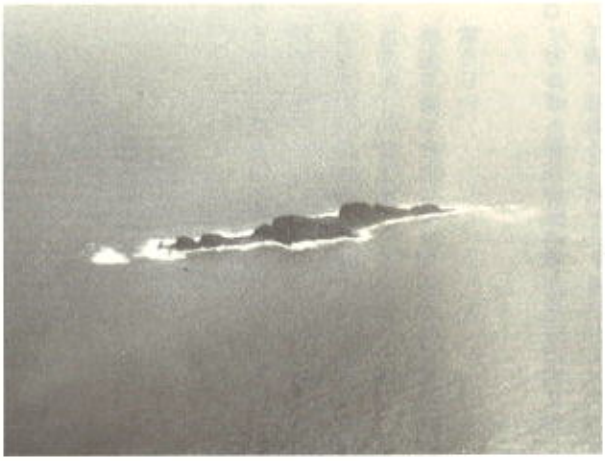
西表の上空から目を逸らせば、もう何も見えない。高波の揺れは益々大きい。気持ちの弛みか午睡の催しか、船酔いのせいか、船上に仰臥すれば、田中上等兵が「暫く休まれては」と帆で目覆いを作ってくれた。暫時、うつらうつらした頃、「紅茶を入れました」と持って来てくれたが起きて飲む元気がなくなっていた。船酔いを知らぬ自分に不思議に思い乍らも重い頭を感じて仰臥することにした。

ふと頭を揚げて振り返ると、遠く離れた西表島の上には更に奇異な念を起こさせるような林立する入道雲が色とりどりに見える。又、全く島の無い南東方面の太平洋上にも、霞む雲の峰が望まれ、海洋特有の景を呈していた。

波照間島に到着

鹿川湾から二時間十分の航程で、波照間島イナマ崎の桟橋に着いたのが十五時十分であった。長さ七～八十米もあり、べらぼうに高いコンクリートの桟橋が架かるというよりも、築かれてあって、そこには十五、六㌧もある漁船が五、六艘繋留してあった。岸の近くに数本の煙突のある家が見られたが、鰹節工場と云っていた。

桟橋に上った。沖縄諸島の南端にある八重山諸島の最南端、現在では日本国の最南端になる北緯二四度、東経一二三度の孤島、波照間島である。当時でも日本の南端、台湾の台中付近に相当する位置にある。桟橋に下り立って遠く霞む西表島を眺めた時、ふと頭をよぎったのは万葉時代の防人の姿である。防人は家を立ち出る時、妻を水盃を交し、任地に下り立って遠く故郷の妻を偲ぶ姿。その頃は淡路島へ渡ってさえ水盃の別離である。今は西表の防人



西表島と波照間島の中間海域に浮かぶ仲ノ神島。岩礁の島で海鳥が舞う。現在国指定海鳥保護区域（昭和63年頃）

防人　さきもりと読む。日本の古代、筑紫、壱岐、対馬など北九州の防備に当った兵士を指す。六六三年、白江村の戦いの以後、制度化された。当初、諸国の兵士の中から三年交替で選ばれたが、後に東国出身者に限られるようになった。

が、又遠く離れた波照間の島の任地に着いたと古に思いを巡らしたものであった。

先程の煙突の家から馳せ参乗って来た二、三名の人が、「お荷物は後で持参しますからどうぞ」と先に立って案内してくれた。前以て連絡する方法もなく、案内を乞うたでもないので、不思議に思い乍ら案内に従った。

桟橋は砂丘に通じていて、此所にも一面にアダンの木が密生して防風林をなしていた。礁の塊の所に露出した白い砂利道をやや上り気味に道を進めて行くと、両面は畑地をなし、粟やキビが貧弱に育っている。畑と畑の境界は畑から掘り出した礁の塊が低く積まれていて、至る所に青々と勢いよく蘇鉄が生い茂っていた。作物は弱々しく痛ましいのに反し、蘇鉄は元気に育っているのは地質によるのであろう。

時ならぬサイレンの音が連続して聞こえて来た。案内の人に「何のサイレンか」と聞くと「貴方様がお見えになったので、部落の人に知らせるサイレンです」と云う。

道路は何時の間にか芝生で覆われた柔らかな感じの道になっていた。ヤラブの林を縫って進んでいる。木の間を洩れる陽光が強く線を描き、光の注射のように暑く感じられた。振り返って見ると、先程までの荒波は嘘であったように静かに光り輝き、遥かに大きな西表島が眺められ、更にその右に微かに石垣島が浮んで見ることが出来た。

突然、国民学校の児童が先生を先頭に駆けて来て、整列をして迎えてくれた。

「どうもおかしいぞ！　何かの間違いであろう」と思って先生に私の来意を告げると共に唯単なる一将校と兵である旨を念入りに話した。

そう云えば私は何の目的の為に波照間島を訪問したかを書いていない。私は部隊命令により兵要地誌調査の指令を受けたのは五月の中旬であったが、天候の都合で出発が延期になっていたのであった。この命令を受けてから将校仲間から羨望の的になっていた。波照間島はその内の一つであって、その他に西表島全土、新城島、黒島、小浜島、竹富島、鳩間島、与那国島がその命令の中に含まれていた。

「せめて一ヶ所でも代行させろ」、「拳銃を持って行けよ」

国民学校　一九四一年（昭和一六）公布の国民学校令により、従来の小学校を改めて成立した。皇国民の基礎的錬成を目的とする初等教育機関としてスタートしたが、一九四七年（同二二）に廃止された。

兵要地誌調査　軍隊において作戦を策定及び遂行していくために、地域に関する自然、歴史、文化、生活などの資料を収集するための調査のこと。

「パーシバル*将軍と間違えられ、殺されるかも知れんよ」
等と冗談や、冷やかしを受けていたのであった。

島人の出迎え

学校で休憩する内に、校長、部落会長、続いて警防団長、在*郷軍人分会長がどしどしとやって来た。この日は偶然にも年に一度の神祭り、豊年祭で部落の主な人々は皆神詣りの最中であった。

「サイレンを聞いて神祭りを中断して、急いで桟橋に駆け付けたが、既にお発ちになった後で、お出迎えも出来ず」

と皆々が大変な恐縮ぶりに、却って当方が恐縮するばかりである。

出された茶菓子は、ベットリと柔らかなキャラメルだったので、「この菓子は土地で作られたものか」と尋ねると、

「なかなか、そうではありません。二六〇〇年記念に配給されたものでして、お客様用として残してある品物です」の返事に驚かされた。（二六〇〇年は昭和十五年のこと）

三年前のお菓子には、どうしても手が出せず、後からも気の毒なことをしたと悔やまれてならなかった。

「一旦、宿にお引き取り頂いて、ゆっくりおくつろぎ下さい」の言葉に部落の年中行事の神祭りを中断してまで皆様を引き止めてはならぬと思い、勧めに応じることにした。

菊の葉のような、仏僧華に似た名も知らぬ花の咲いている家に案内されたが、勿論、宿屋ではない。畳はなく薄いゴザを敷いた小さい家で、どこかの民家の離れでもあるのだろうか進幸丸の上里という船長と、警防団長の西田原と云うお二人が終始面倒をみて何かと心遣いをして下さったのには恐縮した。

風呂を案内するというので、気軽に家を出ると、二〜三百米も歩いた野中の共同浴場らし

パーシバル将軍　日本陸軍がシンガポールに島に侵入した時のイギリスの司令官。昭和一七年二月一五日、山下奉文司令官率いる第二五軍に降伏した。その後、満州に抑留されたが、昭和二〇年九月二日、東京湾上での日本降伏調印式に臨席した。

在郷軍人　平時は民間で生業に就いているが戦時には必要に応じて召集され、国防の任務に就く、予備役・後備役などの軍人。

い。共同と云ってもさ程大きくない釜の縁をコンクリートで固めたものである。部落では当番制にして、浴場係を設けてあるというが、島は水不足で贅沢な水使いが禁じられている。今年も二ヶ月も雨が降らないので、水不足して田は全部大亀裂が出来て、稲穂は全滅に近い状態である。

珊瑚礁の石垣とふく木が家を護る形式は皆同様である。宿舎に戻り表札を見ると、「前花真津」と記してある。家長に挨拶をしないと思い、上里船長に話したが、取り合ってくれない。出入りが多いので誰が主人やら、主婦やら遂に分からぬままになった。

夕食の給仕に若い娘さんが来てくれたが、言葉も立派な標準語であり、料理も離島離れしたもので、久しぶりに都会に出た気分になれたので、尋ねると那覇と基隆に暫く奉公に出ていたと云う。船長の話で泡盛を盛んに勧められたが、此地の酒は粟から造るので、深酒をしても二日酔いにならぬと強調する如く甘口で、口当たりが柔らかである。泡盛は本来粟盛か出たものだと云われた。

夜も九時になった為、「明日の事もありますので」と食事を切り上げて貰うよう船長に話した処、豊年祭の催し物の巻踊りを是非見て貰い度いと案内された所には、村の名士がずらりと並んだ宴席である。

校長の挨拶で「この波照間島に初めて日本軍人将校を迎えた事は未曾有のことである」と切り出して歓迎宴の幕が開いたのであるが、土地の風習であろうか、一人一人が盃を貰いに口上よろしく永々と弁じて詰め寄せるのであった。

前面では巻踊りと称して男女入り乱れて松明を燃やした中で、素朴そのものの原始的な踊りが繰り広げられている。一年に一度の村の男女の楽しい夜で開放された自由の夜を、ドラ係の鐘を叩いて夜明けまで踊り通すのだと云っている。

老いも若きも泡盛を飲んで踊り狂う綺麗な星月夜に南風心地よく吹き、平和な孤島の南国情緒が繰り広げられる、この偶然の機会に訪れた思い出は忘れず残るであろう。

宿舎に戻り、汗ばむ肌に風を通して床に就いたが、ワッショ、ワッショと云う掛け声と鐘

フクギと石垣に囲まれた波照間島の集落景観（昭和62年頃）

の音が遠く微かに聞こえて来る。昼の疲労もあってか、この辺鄙な宿の床の上に夢路を辿ったのは一時になっていた。

六月二日（水）

島の兵要地誌調査

近くから遠くまで鶏の夥しい様々の鳴き声に目を覚ましたが、またうつらうつら寄せる内に昨夜の人達が訪れて来た。八時三十分、出発の予定として案内を依頼していたのだが、まだ七時になったばかりである。よく聞けば、昨夜は徹夜して飲み、踊り通したそうである。朝の爽快な空気の中を朝会前のひと時付近を散歩して見た。芭蕉やヤラブの木々に朝光が輝く当りで、突然見知らぬ男の人が丁重にお辞儀をしてくれた。

「礼儀の正しい島だナ」と思い乍ら軽く頭を下げて宿へ帰ってみると、その人が座敷に座って煙草を吹かしている。「さては、この家の主かな」と思い欠礼を詫び乍ら、「昨夜給仕が出て頂いた婦人がこの人の奥さんか」と思い話してみると、近所の手伝いの娘であった。

すっきりと晴れ渡った青空、今日も暑いであろう。午前中は陸地を見る予定として、昨夜の上里、西田原のお二人を案内にお願いしていた。

平坦な原野は所々に珊瑚礁が隆起していて、蘇鉄やバンザクロ*が密生していた。心の中で飛行場適地（三〇〇米幅、二、〇〇〇米）を確かめていた。ヤラブの林を抜けて南岸唯一の浜辺に出た。約五〇〇米の白砂の浜を形成し、太平洋の怒涛が真正面から押し寄せていた。

遥か水平線にスコール*を孕むらしい入道雲が見られた。アダンの実が赤く熟した道を汗を流して歩く途中突然驟雨あり、と思う間にたちまち晴れ、又襲う。スコールの特色である。汗と雨にしっぽりと濡れたまま、カラリと晴れた熱日の下を歩み続けていると、この辺一帯は放牧地らしく、牛が悠々として我等を眺めていた。

バンザクロ　グァバの別名。バンジロウともいう。沖縄では一般的にバンシルー。熱帯アメリカ原産で、果実は球形または卵球形で香りがよく食用となる。

スコール　熱帯地方や亜熱帯地方で見られる強風を伴う激しいにわか雨のこと。

一昨夜十二月に不時着したという、損傷した重*爆撃機を見て、外という部落に入った。仲本信幸氏宅に小憩させて貰った。

茶菓子の黒糖という事は、沖縄に来て初めて知った事であるが、ここでも定石通り出された外、ビール、パイ缶、そしてゆで玉子まで供応に預かった。ゆで玉子を見た瞬間、妻の顔がよぎるのを感じた（妻はゆで玉子が好きであった）。

渇きを覚えた時のビールは身に沁みて美味しく頂戴することが出来た。仲本信幸氏は本島でも有力者で、鰹節製造でも第一位を占め、進幸丸を二隻所有されている、と聞かされた。案内された船長もこの船の一つであった。

宿舎に戻って素裸となり、汗を落として着替えをしていると、昨日の国民学校の校長先生が見えて、「午後の予定に講演を加えて欲しい」と熱望されたので辞退出来なかった。「何を話そうか」と考え乍ら会場の壇上に立つ事になったが、大東亜戦の原因と現在の戦況を語り米国の対日軍備に及ぶと一時間半も時間を要した為、午後の予定の島一周を三時に出発することにした。

部落会長の田福氏、校長、巡査の伊佐氏と午前中の人が同行して下さったので多勢となった。桟橋を出航して東岸に向った。大波の岩壁に打ち砕ける様は実に大洋の偉観を見せ付けられた感がした。

特に高那崎の断崖は勇壮であって、玉福丸が波に翻弄され、幾度か大波の中に突っ込まざるを得ず、波に掠われないように船にしがみ付くのが精一杯である。「大丈夫かナ？」と船長の顔を眺めるを得ない。舳先と波をキッと睨んで舵を握る船長の顔には少しの油断も隙も無いの見て頼もしくさえ覚えるのであった。

一時間四十五分、波に揉まれて上陸した時はさすがホッと安堵の胸を撫でおろした。この間にガーラという魚を一匹釣っていた。この魚は、トカキンに比して甘味のある刺身に好適で六斤あると云っていた。

一点の雲のなく晴れ渡った空から西陽が眩しく海一面に輝き、仲ノ神島がクッキリと岩肌

波照間島の東部にある高那崎。十数余の断崖が続く（昭和18年）

重爆撃機　爆弾の搭載量が大きく、航続距離も長大な大型爆撃機のこと。重爆と略称される。

ガーラ　カスミアジのこと。沿岸に生息し、容姿は美しく、銀鱗に輝き、動きは活発である。釣りの醍醐味を味わうことができ、美味である。

を露骨に浮べていた。海は色とりどりの珊瑚礁を描き出し、南海の美を惜し気もなく拡げている。

ヤラブ並木と芝生で覆われた道路は、熱気を防ぎ、緑したたる木々の下に山羊や牛が静かに立ち尽くしている。所々に物見台が設けられている。此の台は昔から造られたもので、礁塊を高く積み上げ、その上を平になして火を焚いて航路を示し、火急の際の烽火台ともなったそうであるが、現在は警防団がサイレンを設置していると云う。

部落中央の事務所にて一同の方々から、調査事項の要点を一括して聴取することが出来、本島来訪の目的を完全に達成することが出来た。

村民の歓待

隆起珊瑚礁から成る此の島は、耕作不能地の多い平坦な土地である為、西表島のように雲を呼ぶ山もなく、天然の水に頼らなければならない。然し、一年中の気温の変化は極めて少なく、高温多湿の亜熱帯海洋性気候と呼ばれている。

当時、私の訪れた頃は、何等の通信機関もなく、定期便など思いもよらぬ事で、冬期の荒海には船の航行さえ、途絶えてしまう文字通り絶海の孤島である。詳細な兵要記録は別記するので、ここには記すことを省略するが、人口一四七八名の部落民は純朴そのものの姿を示し、美しい昔そのままの形で生活している。内地、或いは石垣島が空襲警報発令中でも何のその、知らぬが仏、全てが時代から一歩も二歩も離れた生活である。

今日の浴場は非常に遠い村はずれに行かなければならなかった。最近、五日前には着任したと云う医者の山森さんという家の前に在って、此の井戸が一番多くの水を湧出しているそうである。クバ（蒲葵）の葉で作った釣瓶（つるべ）を持って娘さん達が村の各所から水を汲みに来る姿は、実に閑かな美しい夕景色である。色々の変化色を持った入道雲が西空に夕陽を受けて立っている様は明日の好天を保証しているようであった。

空襲警報　戦闘機等が地上目標を襲撃する空襲のあることを、一般住民に知らせる警報のこと。戦時中、米軍のB29爆撃機による爆弾投下や、グラマン戦闘機による機銃掃射があり、住民を震え上がらせた。

クバ（蒲葵）　ビロウこと。ヤシ科の常緑高木で、高さ三㍍～一〇㍍になり、幹は直立し頂に葉が集まる。御嶽のある所には、ほとんど生えており、神木とされる。葉はツルベや笠、扇子の材料になったりして、用途は幅広い。

夕食は非常に美味しいライスカレーと、今日は釣ったガーラの刺身であった。夜も既に九時が三十分も経過した頃、迎えの人達に案内されて学校へ行った。講堂の正面に立派な舞台が設けられてあって、その正面にテーブルを置き、席が設けられてあって、座れと云う。誠に気恥ずかしい思いをしたが、仕方ないので席に着いたが、西側に名士五～六十名の席が並んでいて、立派な料理膳が泡盛と共に運ばれて来た。講堂の周囲には村人がギッシリと取り囲み、今夜の舞踊を見る為に集まっていた。「日本軍将校をも一目見度いと云う人も居るんですよ」と傍らから耳打ちしてくれる人もあった。

代表して校長先生が挨拶をされた。鄭重な歓迎の辞であり、又、今日私の講演に対する謝辞を感銘深く述べられ、村民全体の熱意を児童と女子青年団の舞踊で受けて欲しいと云う意味であった。私は謝辞を述べたが、場内の人々は勿論であるが、場外に取り巻く村の人達にも聞こえるように少し声を張り上げることにした。

学童の遊技から始められ、次いで女子青年団の舞踊と続いた。此の間、次々と盃を差し口上よろしく出入りが烈しいが、舞踊の説明も細かに披露される人もあった。舞踊は慰問団等で皆馴染みのものであったが、その衣装には特に意を注ぎ、部落間の誇りを見せているように思われた。

波照間島には部落が五区あって、夫々選抜して代表者の競演であると云う。島内全域から集まり、その応援の人達も力を入れているので、是非最後まで見て欲しいと申し入れがあった。仲本氏も「私の隠し芸を舞台でやるから見てくれ」と遂に十二時四十分まで歓待されることになった。

私一人が、この感激の深い孤島の熱情溢れる演芸を見せて頂くことの勿体なさを痛感しつつ、ほとばしる感激の言葉を述べることが出来た。

交通音信の途絶え勝ちなこの孤島に埋もれ、何の障害もなく培われて来たこの独特な民踊と舞踊こそは、立派な芸術であり、文化財である。美しい純な伝説、物語が強烈な太陽の下に営まれる島人の生活、生きんとする生産への働きそのものが民踊となり、舞踊となって育

波照間小中学校。赤瓦屋根の校舎が目を引く（昭和30年代）

って来たものであろう。

校長先生が最初、私と出会った時、「私の言葉お分りでしょうか」と云われた。私は何のことか理解しにくかったが、「先生の挨拶の言葉は正しいか、聞きにくいか」と尋ねられた事を知って、「立派な標準語です」と返事をすると、「有難うございます。安心いたしました。永らく内地の人と話していませんので」と言っておられた事と関連して、島の実情を如実に表現していられると思われる。

宿舎に帰って蚊帳の中に入り、目を閉じても、あの独特な蛇皮線の音が頭の底に残っていて、いつまでも打ち鳴らし続けている感じであった。

六月三日（木）

島を離れる

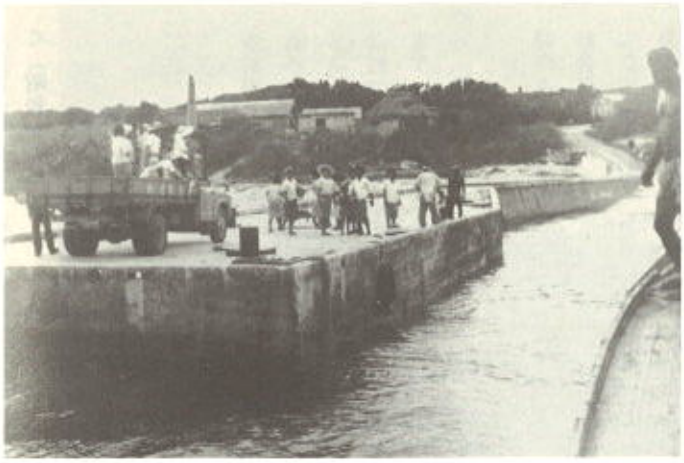
七時三十分出発と云っておいたので、宿の人達はカタコトと立ち働いていたようである。昼の弁当まで準備して頂いてあって恐縮した。

家の前には部落の人達が待ち構えていて、イナマ桟橋まで送ってくれた。南西諸島の男尊女卑の風習が強く、この島でも荷物は必ず女が持ち、男は絶対に持たない。従って女の人は何でも頭に載せて歩く。普通百斤位は誰でも平気であるが、強い人は二百斤を頭で運ぶそうである。

桟橋では仲本氏も待って迎えてくれた。小学児童、部落会、婦人団体の方々がズラリと並んで見送って下さった。尚、土産物として卵を二百個余り贈与された。胸の熱さを覚える感激である。

私は召集を受けて家を出る時さえ、見送りを禁じられた時期だったので、極身近な人達の寂しい別れであった。

蛇皮線　沖縄の三味線、三線（サンシン）のこと。沖縄の三線は棹をリュウキュウコクタンを使い、胴の部分はニシキヘビの皮を用いる。そのため、蛇の皮を張った三味線蛇皮線と言われるが、最近ではほとんど使用しない。



波照間島の桟橋。島の西部にあり、表玄関として賑わう（昭和40年代）

此の厚いご厚意溢れる早期の歓送に、感激溢れる謝意を表しておいた。船を二回旋回し、打ち振る手や帽子が小さくなり、やがてその姿さえ小さく消えるまで桟橋の人影は動かないようであった。

八重山の政治、文化の中心は石垣である。私の波照間訪問の時も、交通、音信の定期便は無かったが、石垣が中心であった。然し、古い昔は西表であった。従って昔は西表以外の八重山諸島には人は住んでいなかった。その点、深い山あり、湾を持つ西表の存在は大きかったのであろう。

然し、西表に住みきれないようになって、波照間島が表面に出て来たようである。初めは島の海岸に住み、水を大切にしたのが、次第に今の部落のある島の中央に移り住むようになった。それは丁度出会った年に一度豊年祭のように、又、私の目に強く印象づけた水汲み姿のように、この島の祭祀の形が残されている事を感じさせるのである。

私の兵要地誌調査の任務は終えたが、若し許されるならば、この島に少し滞在して民族誌の一端を探り度いものであると思うところは、この島を歩き島民と接し、祭りを見た人は誰でも抱く感情ではなかろうか。

波照間島を後にして、南風見へ

如何に晴天の日を選んでも、南風見崎付近は怒涛が荒れ狂っていて、接岸を許さない。岬の広く長い暗礁を遠く廻って東岸に船を進める迄には、どんなに船に強い人でも気分を悪くしない人は無いではなかろうか。岸に遠く離れた所に船を停め、小伝馬に乗り移らねばならない。そこは荒海を忘れた別世界のような、礁に囲まれた静かな海である。然し、小伝馬さえ容易に接岸出来ず、探し求めて漸く海岸に下り立つことが出来るのである。

風土病と悪性マラリアの巣窟で、南風見部落は廃村となって久しいのであった。その部落の跡を探る目的で下り立ったが、道も無い草原は遥かの山裾迄坦々とした草原であって、取

空から見た西表島東部。手前が仲間崎、後方は南風見崎。その間を仲間川が流れる（昭和63年頃）

南風見部落　琉球王府時代から大正中期まで続いた西表島南東部にあった南風見村のこと。同村は一七三四年（雍正一二）、波照間島からの寄百姓によって村建てされた。王府時代には与人や目差が置かれ、行政村として独立し反映した。しかし、明和の大津波（一七七一年）後、村は疲弊しマラリアなどもあり人口は減少、明治を経て大正九年（一九二〇）には、残余の人たちが新城島に移住し、廃村になった。

り残された老松が、老巧な庭師の手に育てられたような優美な姿で、二本、三本と生育していた。「まるで公園のような広い芝生の緑と、海の碧さが調和して一幅の絵となるような自然が何故廃村になったのであろうか。このまま放置されて良いのだろうか」と思い乍ら草原を歩いて松の木陰に進み、既に昼が過ぎているので食事を摂ることにした。おにぎりを一個、ゆで玉子を一個食べるのが精一杯であるのは、先程の船酔いが原因かも知れない。

小憩後更に部落の遺跡を探って歩く内、突如、三間中（六米）の立派な道路に出会った。一見して専門家の設計になるものと分かったが、まだ新しく側溝も灌漑用水路も造成されている。不思議に思って、その道路を進んで行くと、遠くに赤瓦のような家屋が一軒目に入ったのである。

廃墟と思いきや近代的道路があり、水田の区画も出来、牛の放牧も目に入る所へ来てしまった。その一軒家に近付くと牛の群れが物珍しげに、我等を眺めて立っていた。その家は台湾人の雑居小屋で、全く言葉が通じない。中に主人らしい一人が居て、標準語も達者に付近の事情の話があった。「西瓜を切って食べよ」と勧められて、喝した口に美味しく頂いたが無人の世界と思いきや夢のような現実であった。

「事務所があるから案内しよう」と申し出てくれたので、「仕事に迷惑をかけては」と辞退したが、「今日は遊んでいるから」と先に立って案内をして頂くことになった。この台湾人は永く此の地に来て、先程来見て来た土工を営んでいるそうである。歩き乍ら、「病気はどうか。マラリアは如何」と尋ねたが、「恐れることは少しもありません」と平気で答えられていた。

事務所という所に案内されてみると、「沖縄県耕地開拓南風見出張所」と看板が掲げてあって、県耕地課技手・照屋善清という方が主任となって事業を進めていることが分かった。氏の話によれば、土地開拓に県営で六十万円を投じられ、昭和十九年中に完成して新城島住民を此の地に移住することになっていると云う。

又、住民は特に迷信を重んじ、住み馴れた土地を捨てる事を極度に嫌い、移住を拒み、台

沖縄県営開墾事務局南風見出張所。大原にあった（昭和17年）

又、住民は特に迷信を重んじ、住み馴れた土地を捨てる事を極度に嫌い、移住を拒み、台風には家屋が吹き飛ぶと神の怒りと云い、承服し難いが、今旱魃で困っている島民は漸く移住の気が起こっているようである。

それにつけてもマラリアで廃村となった土地の事でもあり、医療施設を充実する事を急ぎ既に診療所も完成したと云っている。所々に飯場が建っていて、炎天下の建設に邁進している姿を見て、非常に感激を覚えたものである。

南風見の廃村跡観察は意外な光景を見ることになった。豊富な水と広大な沃野に現代式の耕地と住宅造成が着実に実施されている状況を目にして、思わず長時間を費やしたが、午後四時辞去した。大きな曲がった角を持った水牛が草を食む姿もエキゾチックな感を呼び起こすのであった。それにつけても、何故便利な船着場を造らないであろうか。

態々照屋氏と例の台湾人が船まで送って来てくれた。干潮時になっていた為に船は更に千米も沖に退いていた。干上がった珊瑚礁の上を歩きつつ、ふと「白い壁画」の場面を想起した。船が出る迄二人は岸に立って手を振りながら見送って頂いた姿に、南風見の将来の幸を祈らずにはおられなかった。

今日の予定は、午前中に南風見を見て、午後は新城島を見てから黒島で一泊する事にしていたが、意外に時間を費やしたので、一路、新城島上地に急ぐことにした。海上直距離にして七五〇〇米であるが、付近一帯は海底が珊瑚礁になっていて隆起も多く、水路を選んで航行して時間も一時間余は見なければならない。赤、青、黒褐色と色とりどりの波浪を分けて心地よい航路であった。

新城島

新城島上地に船を着けたと云っても、やはり沖に船を停めて小伝馬に乗り移り海浜に着けるのである。土地には珍しい白い服を着た五十五、六歳位の立派な風采の人が居て、国民学校へ案内してくれた。この人は「局長」と云っているので、郵便局長さんのようで、土地柄

新城島上地　上地島と下地島から成る新城島のうち、上地島のこと。西表島と黒島のほぼ中間海域に浮ぶ。『宮古八重山両島絵図帳』に上離嶋、『絵図郷村帳』には上離島として記す。一九四三年（昭和一八）時の人口三〇七人。かつて小学校があったが、一九七五年（同五〇）に廃校となった。

上空から見た新城島。手前が下地島、後方は上地島（昭和63年頃）

に詳しい方であった。

校長は不在で若い男女教員が、児童を、警防団を、在郷軍人をと連絡に大変右往左往し、狼狽の態であったので、お気の毒に思い、目的を告げて局長さんお一人で結構である旨説いたのであった。

本島には淡水はないので、西表島南風見から運んでいる。海上とは云え八粁の彼方から淡水を運んでいると云う嘘のような真実。水田は皆無。珊瑚礁の原野を開拓して畑を造り、雑穀、芋類を耕作する。漁業を営まずと云う誠に奇妙な生活もあるものだ。

村を一巡することにして、在郷軍人分会長の案内を受けることにした。取り立てて変った状態もない。物見台も設けられてあるが、兵要地誌として取り上げることもない。

一体、八重山では神を祭る事が非常に熱心である。ところが「祭神は何か?」と聞いても今まで誰一人も明確に答えられないのである。

「昔からの神様です」と云う。鳥居があり、拝殿もあり、内地と神様の形はよく似ているが、神体はガジュマルであったり、クバの大木であったり、岩である。そして神前に線香を焚く神仏合体の思想でもある。「御岳さん」と称している。私は信仰に関しては調査の対象外であるので、ここでは記すことを省略する。

前述した如く新城島民を移す新天地が南風見に立派に出来つつある事から、根強い郷土愛もさること乍ら、珊瑚礁でない本当の土壌の上に、新しい新城の誕生する日のあることを祈った。

陽が西に傾き、白砂の上に立つ陽炎の中を船に戻り黒島に向う。海上八粁。ギッシリと敷き詰めた珊瑚礁の海を船は快調に進んだ。

黒島

黒島の北岸、保里部落の桟橋に着いた時は夕方の六時三十分であった。部落の人達と波照

御岳さん　琉球諸島に広くある御嶽を指す。本土の神社とまったく性格を異にする。一村に一嶽だといわれるが、八重山には一村で数ヶ所ある。「村の鎮守の神の斎場」などと言われ、村愛護神の要素が強く、祖霊神、島立神、島守神、ニライカナイ神、航海守護神に関係する聖地で知られる。御嶽には必ず神司がおり、全ての神行事を取り仕切る。

上空から見た黒島（昭和63年頃）

間長全という巡査が桟橋に出迎えてくれていた。「先程漸く連絡があったので」と巡査が大変狼狽しておられる様子であった。宿舎に定められた部落会長兼区長宅へは約四粁、落日の強い陽光を浴びつつ流汗淋漓歩かねばならなかった。

島の姿で変っているのは、木毛という木が至る所に生育して、私には初めて見る長い毛のような葉をして雲を突く成長ぶりで、県の指導による防風林という事である。草深い野道は伊古部落に入ると、立派なコンクリート舗装されたような街道で平坦な道路の両側には礁塀が巡らされた家が並んでいた。尤も珊瑚礁の道であってコンクリート舗装ではない。

東筋の部落では「たばこ」の赤い看板が太い大きなガジュマルの木に掲げてあるのが目に入ったので、店は何処かと探したが見当らなかった。此の部落が黒島の目抜き通りで郵便局も目についた。

玉代勢太郎氏と云う区長宅は立派な家で、畳も障子も揃っていて内地と変らぬお家であるので、久しぶり内地に泊まった味を満喫出来ると思ったが、井戸水は塩水であった。区長は石垣に出張中で留守の為、巡査の波照間氏が我が家の主人のように終始接待をして頂いた。

此の所でも泡盛が醸造を許され自慢の品である。鶏肉、鶏卵の様な料理に満腹し、早々安眠の時間が欲しいと思ったが、女子青年団の舞踊慰問があるから是非という要請に応ずることになった。

飼育所と称する広い建物に案内されたのは既に夜十時三十分であった。舞台が設けられ、その周囲に部落の幹部男女がズラリと席を占め、例によって立派な膳が並べられ、泡盛が出た。局長の挨拶に始まり、舞踊の開始されたのは十一時半にもなっていたと思われる。

開始の遅いことに不満は云えない。唯一人の軍人の為に五ヶ所の部落から代表者を選出して衣装を着け、舞台を作って踊るという誠に面倒な事である。まして、その上、料理も立派なもので、その準備はどんな方法で運ばれたものか、全く恐縮である。

舞踊は何処も同じようなものであるが、土地柄を織り込んだ特色は見事なものである。最後の「黒島節」は東京へ二度出演して好評を博したと自慢のものであった。

黒島　西表島の東方海上にあり、西方に新城島が浮ぶ。『宮古八重山両島絵図帳』に十カ村の村名が登場し、その中に上地村、下地村もある。大浜、宮良、石垣の三間切制移行（一六二八年）までに黒島村、保里村に統合されている。琉球王府時代には石垣島の平得、平久保、さらに鳩間島へ寄百姓した。一七二三年（雍正一一）には保里村を黒島村に統合し、一島一村となる。一七三七年（乾隆二）には黒島、東筋、保里の三集落からなり、村番所は黒島村（宮里）に置かれた。その後、村分けがあり、一九〇四年（明治三七）の新開には宮里、保里、仲本、東筋、伊古、保慶の六村の名が見られる。〝無水島〟のイメージが強く、生活用水等の確保に苦労した歴史を持つ。しかし、現在、西表島からの海底送水によって水問題は解消した。現在、保里、宮里、仲本、東筋、伊古の五集落を抱える。一九四三年（昭和一八）時の人口一二二六人。

一時半、歓待を謝して退席したが、宿舎に戻っても尚、蛇皮線の音が聞えて来た。宮里、仲本、保里の人々はこれから尚、一里以上も歩いて帰るであろう、と思へばお気の毒至極である。

六月四日（金）晴

鶏が目を覚ましてくれた。此の家に子牛ほどもある大きな豚や子豚が飼育されていたが、土地では皆豚を飼い、部落内で全部食ってしまうと云う。白豆腐の味噌汁で朝食を非常に美味しく頂いたが、連日の睡眠不足は如何とも致し難い。

八時三十分、集合をお願いしてあった各部落班長、警防団、在郷軍人等二十余名が参集して頂いたが、何故か国民学校の先生だけが不参加していた。所要の質問をし、所要の話をしたが、部落内の不統一が目立っている感じであった。

土地の案内を依頼せず、田中上等兵と二人で各部落を訪ね、全島内の地形を踏む事にした何処も同じ平坦な原野が隆起する礁塊と蘇鉄、アダンの密生を成していた。島の周囲三里半半、農家の苦労の多い島である。

仲本部落には鱶に助けられた伝説の家がある。何処からか青年学校の生徒が二名やって来て「鱶の家へ案内します」と先に立って案内してくれた。門に「多良間幹雄」の表札が掲げてある。家の中の婆さんは言葉が分からず困っていると、青年の一人が外へ走り去り、上品な婦人を一人伴って来た。

家の中はガランとして家具は見当らないが、蚕の繭が立派に出来ているのが目に入り不思議な感に打たれた。保存されてある書類は写であって、迷信を信ずる地の人は貴重な文献は全部焼却して写だけ残すのだ、と云っている。

鱶を黄鯖と書かれ、助けられた人は多良間真牛と云い、鱶の背中に乗っている絵も描かれている。話は二五〇一年の出来事で百三十年前のことである（西暦一八四一年）。伝説の説明

閑静な佇まいをみせる黒島の集落。石垣、フクギ、赤瓦屋根の民家、そして白砂の道路（昭和49年）

は省略するが、此の家の人は勿論、部落の人は皆鱶を食せぬ風習が今も続けられている。南海の離島のこの珍奇的な伝説を一概に笑い去る事なく、大切に伝承され度いものである。光に濡れた緑の葉の茂みに、山鳩が飛び交い、山羊が心おかしく鳴いていた。

此の所から国民学校へは約十五町、青い芝生が綺麗に植えてあるのは児童達が植えたもので、裸足の登校には好適であろう。学校から放射状に各部落に通じている、この立派な道路を見て、子を思う親の心に胸を締め付けられた。木陰で昼食をして、昨日通った長い野道を保里の桟橋に向った。

桟橋には婦人団体や部落の人達が百名以上が見送りに来て下さった事は、感激の至りであった。その上、鶏を十羽、卵を九十五個を土産として贈られたので、有難く頂戴することにした。

折から干潮時の為、玉福丸は桟橋を二〇〇米も沖に繋留されてあったので、小伝馬に乗り移り、歓送を感謝し黒島を後にしたのは午後二時半であった。此の平和で静かな山羊の鳴く声に、これより僅か一ヶ年後、あの悲惨な戦争の嵐が吹き始めたのである。

古見

黒島を後にして海路十三粁、西表島の東岸、古見*に向った。古見の海岸は珊瑚礁が遠く、海に突出して岸から約二千米も沖に船を留めねばならなかった。水路を求めて出来るだけ岸に接近しようとした船長の苦心も果さず、小伝馬を下すことにした。

眼鏡で部落を見ると、芭蕉や雑木の中に点々と人家の屋根が見られた。何故、斯様な不便な場所に部落が出来たのであろう。その昔は今の石垣の町と匹敵する繁栄ぶりを見せていたと云うが、風土病で人口が漸減し、寂れていったと云うことである。

小伝馬で約千米岸に近付けたが、それからは岸まで千米干上がった礁の上を歩かなければならなかった。部落の入り口には藁小屋のような国民学校が在った。区長も、部落会長も、

古見　西表島東部にある古い集落。前良川と後良川に挟まれ、自然が豊かな村である。史跡も残っており、前方にある平西島の平西貝塚、さらにカサ崎および赤石崎のスラ所（造船所）跡などがある。オヤケアカハチの乱（一五〇〇年）の直前、アカハチに追われた長田大主が隠れたと言われる跡地もある。『宮古八重山両島絵図帳』には見えないが三間切制移行時（一六二八年）には石垣間切こミ村とある。村には首里大屋子が置かれ、周辺の小村を管轄した。明和の大津波（一七七一年）までは繁栄したが津波以降、村は疲弊し人口は減少の一途をたどった。沖縄県設置の翌年の一八八〇（明治一三）の時、戸数四〇世帯、人口一三三人。小学校も設置された。一九四五年（昭和二〇）時の人口八九人。そのうち二三がマラリアに罹った。

学校の先生も、皆留守である。一体、何の事だろう。

遂に学校の先生の家を訪ねることになった。色の黒い男の子供の着物を身に着けた、はち切れそうな健康体の娘さんが、お茶と黒糖を出してくれた。

「何故、子供の着物を身に着けているのか」と尋ねることも出来ず、丸々とした太股から目を逸らして、「言葉分かりますか」と聞くと、「知っていることはお話します」と余りに明瞭な言葉遣いに意表をつかれた思いであった。

質問して知らぬ事があれば奥に入って聞いて来る。奥の人は病床に就いていると云う。まだ去年の十二月、戦地から戻った（現役除隊）若者で、遂に直接襖越しに話すこととした。古見の戸数二十六、七十八名が住んでいて、在郷軍人も警防団も、他の団体の組織は何も結成されていなかった。

娘さんは今年の初めまで大阪の天王寺の親戚で居たことも分かり、道理で馴染みのある関西弁であった。

此の浮き世離れした土地に、年々マラリアで斃れてゆく中を住めば都か、居住する人の心理も不思議である。而も大阪に住んだ人が、この南の離島の一隅に世間から取り残されたような、この寒村に見い出した事も不思議である。

調査には無駄骨を折った事だが、又兵要地誌の上では評価されないとしても、将来の発展の足掛かりとして古見の地の上に光あらん事を祈る気持ちで漸く満ち来る潮に待つ小伝馬を求めて岸を離れた。

付近の海中に海綿の養殖が多く見られるのも目新しい風景である。沖縄は又、お茶の国とも云ってみ度い。人訪れば必ずお茶を出される。そのお茶も必ず芳香特殊な茶であった。

いつでも熱い湯が準備され、茶器が備え付けられている。茶菓子に黒糖が出されることも内地では考えられない事である。夕陽輝く銀波の珊瑚礁の間を縫って船を進める上をカモメが飛び交い、海上八粁の小浜島を目指した。

古見の茅ぶき民家（昭和40年頃）

小浜島

小浜島の浜も遠浅で、船長に背負って貰って下り立った白砂の浜は、すでに黄昏ていた。野良の帰りであろうか、小馬と共に海に浴びる村人の姿が見られた。

船長は一貫余りもあるガーラという魚を棹に刺して背負い乍ら部落に向った。丁度一升瓶を負って潮水を汲みに来た村の子供に、部落会長の家を教えて貰った。来意を話すと、「私方には八重山中学校長が泊まっていますので、宿はできませんので」と案内された家は宇保英一と表札のある青年学校の先生の家であった。

区長の仲本氏を初め、部落会長や、竹富村役場職員が挨拶に来られて、「今夜九時から中学校長の講演があるので、その時に一席話して欲しい」と要求されたが、「目的は調査であって講演ではないから」と固辞したが、出席することを約束しておいた。八重山中学校長の稲垣先生には別に面識もあった為、辞退するのも失礼と思い、挨拶に行く意味を告げておくことにした。

夕食の米は炊いてくれたが、副食は何もない。持参の口は今日までお世話になった家へ置いて来たので、幸い船長の釣ったガーラを刺身にして食事が出来た。国民学校で催された中学校長の講演会場は満員の盛況であったが、暗いランプが非常に惜しい気がした。講演内容は、教育者として精神教育面に重点が向けられているようであった。最後銃後国民の犠牲が要望されていた。

部落会長の要請で壇上に上り、先生とダブらなぬよう心掛けて、持久戦に対応する銃後の覚悟を説いておいた。校長に挨拶し、引き続く宴席を辞退する非常を詫びて宿舎に戻り眠ることにした。

喉が渇き、茶を要望したが、家人は寝ていて起きず、聊か困惑したが、連日の疲れがあって、いつの間にか眠ってしまった。それでも小浜島の夜は十二時を過ぎていたようだった。

私は四泊五日の出張命令を受けている為、明日はハードスケジュールになるが、小浜島を

上空から見た小浜島（昭和63年頃）

銃後国民　戦場で戦う兵士たちの背後にいる者、つまり戦線から遠く離れた本国にいる一般の住民たちを指す。まず隣保班、後に隣組が組織され、兵士の送別、歓迎、出征家族の援助などを行い、空襲があると防空演習に駆り出された。

見、西表北岸を見て是非、帰隊しなければならなかった。

六月五日（土）晴

宿舎の主婦と思われる方は少し標準語が話せる。「私が英一のお母さん」。青年学校の先生、宇保英一氏のことである。「私の主人は二十五歳で亡くなり、子供は英一が一人です」と語っておられた。朝食は、昨夜の刺身が汁の中に入っているだけで、他に何も無かった。

小浜島の最高峰、大岳（九九米）に登る為予め部落会長と分会長に案内を頼んであった。島の土地が全般的に低い為、大岳は非常に高く感じた。島の人は「此の山に登れば、与那国島を除けば八重山諸島が全部見える」と云っていたように、頂上に立てば、西表、波照間、新城、黒島、竹富、石垣の島々が潮風に煙る中に浮んで見ることが出来た。

山があるという事は雲を呼び、雨を降らすことになる、という事を、この旅行中に初めて体験することが出来た。諸島の多くは珊瑚礁の隆起で山がない。為に雲は島留まることなく素通りしてしまう。西表島の上空のみが常に雲を漂わせている。

小浜島は西表島に接近している為、西表に降らす余服がいつも小浜島に雨を降らす。従って干天続きの日和りでも、小浜の西海岸は稲がよく出来ると云うことである。天水田と水田に恵まれたこの島は誠に天恵の島と云うべきであろう。

大岳には松が植林されている。これは島民が協力して植林したもので、二十年生だと云っている。然し、誠にお気の毒なもので絶えず海風に打たれ、又台風の為成長も出来ず、漸く松の存在を残しているに過ぎない。

頂上から眺めて東北の直ぐ下に、全島芝生の平坦な島が嘉弥真島と云い、村有地で牧場になっている。

島の南岸は平坦な水田をなしているが、軍用地の価値が乏しいようである。芭蕉の実が熟れていないので不思議に思って尋ねると、台風の為倒れたので新芽の成長が遅れていると云

青年学校　一九三五年（昭和一〇）、実業補習学校・青年訓練所を統合し、全国市町村に設置された学校。小学校卒業の勤労青年に職業教育、普通教育、軍事教育を行なった。一九三九年（同一四）、満一二歳から一九歳未満の男子は義務制となり、軍事教育が中心となった。一九四七年（同二二）廃止された。

天水田　雨水を貯めた水田のこと。山があり水が豊富な島なら、水を引き通常の水田が作れるが、水が少なく、それでも稲作が求められた島では、天水を最大限に活用した水田を作った。田圃の底は水牛や牛で踏み固めた。波照間島でも昭和三十年代後半まで見られた。

う。それでも後一ヵ月もすれば、ふんだんに出来るそうだ。牛、馬、山羊、豚は各戸に欠かさず飼育しているのが此の島の特色だと云っている。

炎天下でも雨が降っても、夜も昼も野原に飼い放っている。これ等の動物は随分と日光や雨露に強い事だろう。

船の待っている細崎まで約四粁を歩くことにした。原野には所々に想思樹が午後の太陽を受けて緑が輝いていた。延々と続く野道、アダンの茂みに熟れた実がパインのように赤い美しい色をたたえている。

分会長が小馬で駆けて来て、「馬をどうぞ」と貸して下さったので、流汗も収まり大いに助かった。

細崎は戸数三〇、人口一八一人という小部落であるが、漁業の名残として鰹節工場跡が残っていた。海岸の民家で小憩すると、銅鑼が鳴らされていたので、「出船らしい船も無いのに何だろう」と思っていると、茶や西瓜が運ばれて来て、歓待の合図であったようである。

時間も無い為、部落の人達の歓送を謝して刳舟に乗り、沖の玉福丸に急いだのは午後三時であった。船長は、この島で約一年、糸満人と共に漁業をしていたので、土地にも詳しく水路も明るい人であった。

西表島北部を回り、西部へ

西表の東岸は広い珊瑚礁に囲まれていて、その中に由布島も含まれているが、小浜島を囲む礁との間が狭い水路となっている。従って西表と小浜の島の隔たりは約三粁であるが、船の通路は僅か五〇〇米で、干潮時は礁が湧き上って見事な奇観を呈している。

然し、水路が狭い為に潮の流れが速く、潮の満ち引きと風の強い日は航行は非常に危険で刳舟は勿論、発動機さえ通過不能となる事が多いと云う。小浜島の細崎から西表島の北東端野原崎沖のウ離島までの約五粁がこの狭い水路となっている。

細崎　小浜島の西部、突端に位置する。クマンザキ、クマザキと呼ばれるが、地区の人たちはクバザキと自称する。村内の小浜部落とは歴史的に血縁関係はまったくなく、集落の創設は明治末期に自由入植した糸満や本土の人たちによる。これらの人たちは漁業入植で、大正七、八年頃からカツオ工場が建ち、集落は活況を呈した。今でも漁業が生業である。

上空から見た西表島東部と小浜島。両島間にはヨナラ水道（昭和63年頃）

由布島に接する西表東岸一帯は草原をなし、牧場地帯であるが、その山手は水田が造成されている。ウ離島を左に回れば大海に出る。右手遥かに石垣島が眺められ、左遠く微かに浮ぶのが鳩間島である。態々、西表島の北岸に船を進めることになる。

往時は西表の代表と称せられたという高那部落は、今は廃村になっている。折からの陽は西に、山陰となった部落跡は陰気な感じを漂わせているかに見えた。北岸も同じく礁に囲まれていて、接岸不可能で岸上り二〇〇〇米も沖を航行することになる為、つぶさに観察することも出来ないことは遺憾である。

然し、古見岳（四六八米）の高峻な山が海近くに屹立し、西方のテドウ山（四四二米）に連なり海岸のリーフと共に軍事上の価値低くしと判断し、一路、鹿川浦に急いだ。

黒ずんだ高い山々の連なる北岸も沖の船から眺めると、山頂には雲が重なり今にも雨になりそうで（或いは山は降っているかも知れない）あるが、船上から空を見上げれば巻雲が微かに棚引くだけで、あの山の雲はいつの間にか海上で無くなっている。海上の気温の変化のせいであろうか。

北岸には所々に絶好の湾をなし、その奥に白砂の海浜が見える。満潮時には恐らく岸近く船を進めることが出来るのであろう。決まったように、高い帆柱を立てた大きな山*原舟が浜に乾上がっているのが見られる。船長の話では、石垣方面から柴やマーニ（内地の棕櫚に似たもので繊維を製造する材料）を採取に来ている舟だと教えてくれた。

船はリーフの間を縫って赤離島を遠く大きく廻って、インタ崎に向った。インタ崎は波の上部落を控えていたが、今は無人の境で牧場らしい姿だけが残されていた。雑木の生い茂った山裾に青空と芝生が育ち、公園のような松が点々と綺麗に見ることが出来た。こんな良い土地が何故廃村にしておくのか、防癘対策さえ施せば立派な村が出来るであろう。

鹿川浦は非常に広大な湾をなし、その湾口に鳩離島が絶好の防波堤をなしている。好適な泊地になると思いきや、湾内は浅く、その要をなさない事が分かった。然し、西表北岸の唯一の港湾としての価値の大きいことに相当未練を感ぜずにはいられない。

大きな口を開く船浦湾。干潮になると干潟が出来上がる（昭和50年頃）

山原舟　沖縄本島の山原地方と中南部、離島を結んだ木綿帆を掲げた帆船。馬艦船（マーランせん）とも帆船とも呼ばれる。穀物や日用雑貨と材木、薪炭などとの交易に利用された。

加うるに湾の奥の高い断崖の上から、一筋白い線が真下の緑地帯の茂みに落下する絵を見て思わず固唾を呑んだ。瀑布ではないか！

緑に包まれた山頂から白布を垂れたように、音もなく静かに描き出された様は神秘な荘厳な感に打たれたのである。滝壺を見ようと思い、船を出来る限り湾内深く進めた。雨雲が覆い被さって一しきりのスコールに見舞われたが、潮の流れを見ると、やっぱり潮に向っているようであった。

浜辺までは遥かに遠く、船では進むことが出来ない。その浜辺に点々と黒点があるので不思議に思って眼鏡で眺めると無数の鴨が降り立っているのであった。又、白鷺と黒鷺が仲良く浅い潮に降り立って魚をあさっている様が見られた。

潮に乗って来る小魚を追う魚が小波を立てる、その飛沫さえ眼鏡が捉えた。此の地は鳥と魚の世界なのだろうか。「滝壺を見る」と意を決し、小伝馬を下ろして貰った。浅くて進まない。下りて海中を歩くのも躊躇された。

遂に船員に小伝馬を曳かせて進むことにした。棹で漕ぎ、綱で曳き、舟の底が砂で音を立て乍ら、一寸、一寸と進んだが、なかなか捗りそうも無い。「あの滝の水が流れているのだから必ず水路がある筈だ」と説き、又自らも慰めて自信をつけるのであった。

雨が頻りに襲って来る。幾度か諦めて引き返そうと思ったが、強行した甲斐があって、約一時間後、漸く水路に突き当たることが出来た。急に深く長い棹でさえ、その三分の一は水中に入る様である。

水路の両側の潅木の茂みが迫って来て、木々の間を曲折しながら奥へ奥へ進んだが、間もなくヒルギ林となり、気根が高く乾上がって潮の射して来るのを待っているようである。水路は狭くなるが、絶景が開け行き鰐が出て来そうな感さえする。

大きな水鳥が幾羽も、朽ちた大木やアダンの茂み、さては奇岩の間を上流へ逃げ飛んで行く。太古より自然の巻く姿、人跡を知らぬからこそ残された自然であろうか。

覆い被さる木々の間から突如、飛爆が目に入ると共に、轟々たる轟きが急に耳に入った。

船浦湾の奥を流れるヒナイ川にあるピナイサーラの滝（昭和50年頃）

打ち続くヒルギ林や滝の音

と句らしからぬ文句が思わず口に出た。滝の高さは五、六十米はあるだろうか。幾度か引き返そうと思ったが、強いて舟を進めて来た事が今更良かったと密かに心の中で喜んだ。

態々水路が尽きた。丸い石が多く転がった谷の流れになったので、舟を下りて飛び石伝いに奥へ進んだが、木々の茂みと断崖で進むことも出来ず、又次第に黄昏れて木の下闇が迫って来た為、思い諦めざるを得なかった。見上げれば天上の岩壁から物凄い力で落下する水の音に思わずゾーッと身震いを覚えるのであった。

昔の人は滝を神として信仰した、純粋な神厳な無我の境地に佇んでいた。澄み切った清冽な氷のような谷川の水が黄昏の光の中に輝いていた。振り返ると木々の間から射し入る余光の中に浮んでいる小伝馬の姿が今までのと違った様な美しい物に感じられるのであった。

滝を離れるに際して、「此の滝の名は？」と尋ねたが、「名は知らない。こんな処に来る人も居ない」との事であったので、「『ヒナイ滝』とでも云っておこうと田中上等兵に云っておいた。

こんな場所があるからこそ、訪れる人も無く、又賞づる人も無いが、那智や華厳の滝に劣らない水量と景観を持っている、と感ずると共に西表の島の偉大な力がひしひしと感じられるのであった。古見岳とテドウ山を結ぶ山の奥地は人跡未踏の宝庫なのであろう。この大自然は永く守り続け度いものである。

帰路につく為、小伝馬に乗った頃は、来る時と相違して、僅かの間に潮が満ちてきて往路苦労して探した水路は消え、一面海と化していた。漸くの間であるが、ここにも潮の干満という自然の大きな力があった。

我等の姿を待ちかねたように、玉福丸は沖遥か、彼方に小さい影を浮べていた。沖遥か、と云っても停船した時と同じ位置で、湾内であることに間違いはないのであった。

暮れゆく海の色は次第に黒ずんで、浜の白砂が特に白く感じられるのであった。夕闇が迫って上原と宇奈利崎の視察を断念することにした。

ヒルギ林　マングローブを指す。熱帯、亜熱帯地方の海岸や河口の感潮域で、潮の干満によって影響を受ける泥湿地に生育するヒルギが群生する林。西表島の河川には見られ、壮観である。

山岳地帯が広がる西表島（昭和50年）

「お食事をどうしますか」と問われて初めて食事を忘れていたことに気付き、ご飯を作って貰うことにした。

鳩間島も見えないまま、鳩*間水道を西進した。黒雲が西空を覆い、与那国島方面に頻りに稲妻が見られたが、上空の雲の破れ間に三日月が細く、鋭く光り不気味な夜空であった。宇奈利崎を廻ったのであろうか、南風に高波が立つ西表西岸に出た。

向い風に飛沫が船上に飛び来たり、烈しいかぶりに船が上下し、あたかも怒れる怪獣の如く全速力で突進して行った。

夕食が出来て、揺れる船上を運んでくれるのが大変困難だった。副食物が無いので、土産に頂いた卵で腹に流し込んだ。食べながらも船から振り落とされぬよう、しがみ付くのが精一杯であった。

最近、宇奈利崎から浦内湾にかけて、米軍の機*雷が浮流する情報が多いので、暗夜の航行は非常に不気味であるが、施すすべもなく運命に任すのみである。それでも海面を気にして眺めると、船の両側を明るく流れ去る夜光虫の光は或る程度、安堵感を与えてくれるのであった。

それから約一時間余りで無事に白浜に到着したので、部隊長に帰隊の報告に立ち寄ったが留守であったので、内離本部桟橋に船を着けた。誰か白浜から連絡したらしく、桟橋に出迎えてくれていた。

「ワーッ、お帰り。黒くなったネ。今夜、帰らなかったら捜索隊を出すことに部隊長と話が出来ていた」と池田軍医さんを初め、将校諸君が歓迎してくれた。田中上等兵は、他の兵達を指揮して土産などの荷物の処置に立ち回っていた。

板間の上に莫蓙一枚を敷いた三畳の部屋であるが、我が家である。先ず取って置きの〝さくら〟一本をふかふかと吸ったが、体に残る船の揺れの中に眠りに誘われたのは十一時頃であった。

鳩間水道　西表島と、同島の北方に浮ぶ鳩間島の間の海域を指す。両島間は四㌔余ほどあり、西表島西部への海路になっている。島の周辺にはリーフが広がるが、途中からリーフが切れ、深海になっている。

機雷　機械水雷の略称。水面下に敷設、繋留し艦船が接触したりすると、爆発する機雷のこと。

上空から見た西表島北部。宇奈利崎、浦内川があり、遠くに祖納半島が見える（昭和63年頃）

与那国島

小さな船で大海を航行することは困難なことである。波照間島行きは昭和十八年五月十九日出発の命令であったが、天候の都合で六月一日の決行であった。与那国島行きも漸く六月八日に決行することになった。当時、台湾沖、西表近海の敵潜水艦情報は毎日、驚くほど多いのであった。小さな船だからと云って油断は禁物であった。

白浜連絡所（部隊の船の運行管理をしていた事務所）に電話すると、「ここ二、三日待っても天候に変りはない。南風で波は荒いが、船酔い覚悟なら出港出来る」との事であったので、船足の速い日向丸（千五馬力）を選び、船長と直接話し合いの結果は

「近海では最も波の荒い海域で、西表（外離島）から約五十浬で、七時間の航程。船の転覆のおそれはないが、相当酔う」という事で、了承の上、六月八日午前三時半、出発の約束をした。

与那国島に関しては何の予備知識もない、又桟橋も皆無である。女護ヶ島と云った、という噂があるが、男は出稼ぎで島を離れているからが、住民の中で女性が多数占める意味か、定かでない。地図も無い。船頭に任せて上陸し、役場を頼る外すべなしとして出発することにした。田中上等兵一名が随行である。

六月八日（火）

朝三時に起こされるまで熟睡していた。田中上等兵は二時半に起きて私の注文の粥を作り玉子の汁を作ってくれた。星明けの中をランプ頼りに桟橋に行けば、小伝馬が待っていた。夜明け前の星の色は特異に輝いているように見える。日向丸は五〇〇米沖に停めてあった。石炭船の運天丸の巨体が闇の中に影を浮べていた。

船員の少年に、「お前は船に酔うか？　今日はどうか？」と尋ねると、「酔いません。大

海上から遠望した与那国島。東崎、宇良部岳が見える（昭和18年）

丈夫です」と答えていた。

日向丸に乗り込んで暗い船の上に座を占め、西空を眺めていると水平線の彼方に稲妻が明滅している。方向は台湾北部に当たる。

船長に「天気はどうか」と尋ねると、「大丈夫です」との答えに、「宜しい、出発」と云えば、エンジンの響きも軽快に、正四時、内離島を離れた。湾口を出ると、船首をグッと左に切って外離島の前を沖に向って暗い海を走り続けた。

振り返ると東天の下に西表島の山がボーッと微かに見えた。船の動揺は想像以上に大きいので、「こんな調子が続くことはないだろうネ?」と問えば

「いやいや、まだまだ、大きくなります。これ位は風の方です」と笑っている。「これでは相当やられるぞ。どこまで続くのか、良い経験だ」と覚悟を決めた。想えば当然で、防波堤となる島も無い。南風の吹き抜ける大海である。大自然に任さなければならない。

出発して五十分経過した頃、急にエンジンが止まってしまった。船長と機関長が黙ったまま懸命に何かをやっているので、こちらも黙ったまま「どうか?」とも尋ねずに待った。船に乗れば船長任せ。物すごく揺れる船上で仰臥していると、次第に明け行く東天の色の移り変りがはっきりと眺められた。

然し、船は相当北へ北へ流されている事が後方の外離島の位置で明瞭に分かる。船が走っている時よりも波に揺られている時の方が一層気持ちが悪いものだ。もう二十分も経過したが、まだ動きそうもない。

此の所で船が動かないようだったら、まだ外離の展望哨の目の届く地点だから何とかなるだろう。八粁位のものだから伝馬船は駄目でも泳ぐ自信はある。然し、鯨さえ来る所だと云う。その上、鱶の多い場所だから泳ぐのは危険である。「まあ、暫く待とう」と東天を仰いだ。真っ赤に焼けた空が海に反映している。色とりどりの空の変化、初めて見る海洋上の素晴らしい朝の空である。

日の出の綺麗なのは印度のカンチェンジュニガに反映するダージリンの日の出は世界一で

祖納集落と宇良部岳（昭和18年）

あり、日没の景は真っ赤に染まるジャバ西海と聞かされているが、私はまだその景色さえ見たことがない。然し、今朝の日の出の美観は、実に見難いものではなかろうか。ダージリンの日の出もかくあらん、と想像した時に「トントントン」と動き出した。

今朝、出発の時に笑って、「大丈夫です」と云った少年は寝込んでゲロゲロとやっている。見ていて実に可哀相だが、何とも致し方ない。船上に吐き出したものは波が洗って持ち去っている。少年の酔いを見ても、停止中の船の揺れの中にも幸い自分には酔いを感じなかったので、今日は大丈夫だと自信が出来た。

船は調子よく動いている。態々、本格的な荒波に入ったのであろう。新鮮な朝の海上に次第に霞む西表の山の峰を将に全くの孤舟、大海に乗り出してゆく。

船長は羅針盤を睨み、西へ進路をとっているが、前方には何も見えない。与那国島の姿を求めている船長の心中が察せられる。

出発から三時間経過した。

「見えました」と船長が嬉しそうに叫んだ。その指差す方向に、煙に霞むような一点の山の形が、波と波の谷間に見えた。然し、目を離すと探すのに相当苦労する。

それから更に一時間、快調に走り続けた頃、漸く前方にハッキリと山の姿が確認出来るようになった。横波に乗っては右に、左に傾き、上下の揺れと共に船から振り落とされぬのが精一杯である。例の少年は苦しそうに吐くものも無くなり、可哀相だが船から落とされぬよう縛り付けておくばかりである。

やっと西表と与那国の中間位に位置しているであろう。これ以上荒れることもなかろう、と想っていると、突然、行く手に黒褐色の大きなイルカが二匹、その背を見せてドボン、ドボンと泳いでいる。

怪獣に追われているが如く、船の先頭を先へ先へ逃げて行く。船はイルカの群れの中を進むが如く前後左右にその姿を見ることが出来た。振り返れば西表島はその南部の山の一部が微かに浮んでいる程度になっていた。

ティンダバナとナンタ浜（昭和18年）

羅針盤　磁石の針が南北を指すことを利用して、船舶や航空機の方位、進路を測る機器のこと。

田中上等兵が西瓜を割って持って来てくれたので、それを食べ暫く船上で微睡む。ふと目を覚ますと、頭上も海上もカモメ（カツオドリと人は呼んでいる）が一杯である。鰹の群れの中を走っているようだ。

俄然、大海に浮ぶ大航空母艦の偉容の如く与那国島の全貌が目前に現れた。私の島に対する概念は、なだらかなスロープを持って白砂青松の美しい海岸を想像し、その島には鬱蒼とした森の木々を見るのであった。然し、その名も優しい女護ヶ島の与那国島は決してそのような優しいものでなかった。

突兀としてそそり立つ断崖、太平洋の怒涛に挑むが如き重畳とした岩壁の城塞の連なりである。大自然の営みを目の当たりに見て驚かされた。東崎を北西に岩壁に沿って船を進め、島の北岸、租納港に入港し、ナンタ浜に投錨した。時に十一時三十分。

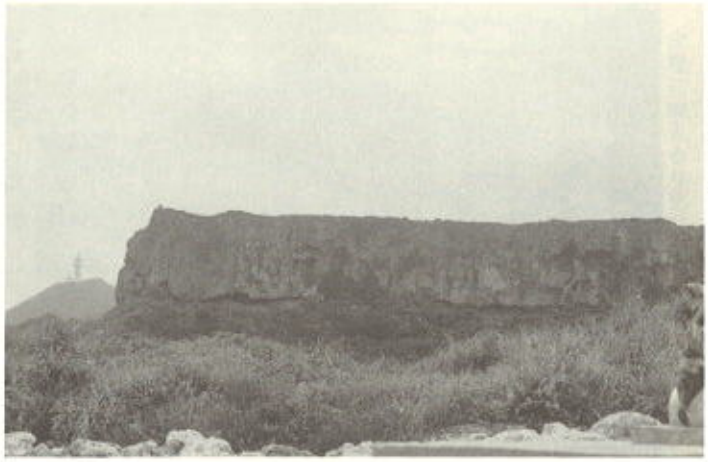
船も無事に自分も酔うこともなく、安着し先ず船長に労を謝した。唯一つ船中で放尿の難しさに悩まされた事は苦しき思い出となった。歌でも伝説でも名高いナンタ（波多）浜に下り立つと、峨々たる剣*阻鼻（ケンガバナ）が目に入る。

無線のアンテナが高く、赤い瓦屋根が緑の木々の間に見えるのも、エキゾチックな感を覚える。浜の海岸は珊瑚礁を利用して港を築き、荒波を防いでいるが、防波堤の外は荒れ狂う大海で、風が北に変れば船は絶対に出入り出来ない。従って風が止む迄は滞在を余儀なくさせられそうである。又、港口の出入りは技術を要し、暗礁に乗り上げたり、荒波を乗り切れずに転覆し、人命を失う事も度にあると云う事も聞かされた。

昔の話に島の女は、旅の船を待ち焦がれてナンタ浜に立つ。遠々から白帆が見えると、各々、草履を浜に並べて男の上陸を待つという。自分の草履を履いた男は恋人として仕えるという草履が運命のトランプであったという伝説の浜も、自然は名にも知らぬかのように、沖の白波は高く飛沫を飛ばしていた。

村役場の職員が一名、旅館を案内してくれた。入波平という民家風の宿で、鶏の糞やゴミゴミした部屋を急いで掃除するのを待って座敷に上ると、在郷軍人分会長、小橋川正吉氏が

剣阻鼻（ケンガバナ）　天蛇鼻（ティンダバナ）のこと。租納集落の南方にある標高百m の断崖から成る自然展望台。岩陰には豊富な湧水がある。同所に登ると、集落を一望できる。



屹立した断崖が続く自然展望台のティンダバナ（平成12年）

訪ねて来た。

小橋川氏の話を聞いて、可笑しくもお気の毒な事である。

与那国の簡閲点呼予定日は六月十一日であったのが、都合で早くなると通知があった矢先軍の船が入港して来たと云うので、さらばとサイレン物々しく非常呼集をした、と云うのであった。

私の来島の意を伝えると、間もなく村長、仲嵩嘉尚氏が挨拶に来訪された。改めて調査協力の依頼をしたが、快諾を得た。

宿の入口に大きな真赤な物僧華の花が咲き、宇良部山の海軍特設見張所が眺められた。入浴を勧められたので有難く早速入浴したが、潮水風呂であった。然し、夕食は果てまで離島で味わえなかった牛肉の野菜煮が出て船の酔いもないせいか、非常に味よく頂くことが出来た。食後はナンタ浜に出て見た。

昔の草履を並べた面影など全くなく、護岸工事が施されている。剣阻鼻が宵間の中から微かな暮色に浮き出て趣ある絵をなしていた。

珍しくそうに集まって来た子供達と話したが、島独特の発音であろうか、語尾が極端に上がり異様に感じられたが、子供達お互いの会話を聞いていると、その異様さが却って美しく耳に残るのであった。

宿の部屋の隣は此の家の家族の部屋である。子供が大勢いて幾家族も同居しているのだろうか。幼児を寝かしつけるのきテンコ、テンコ、テンコ、テンコと繰り返し同じ言葉を発している事を聞き慣れぬ言葉である。然し、蚊帳の中で、それを聞いていると、昼間の疲労が心地よい眠りに入っていった。

涙あふるるナンタ浜は
島の娘の与那国小唄
いつか更けゆく　いつか更けゆく島の宿

六月九日（水）曇

租納集落から見る宇良部岳。与那国島の最高峰（平成12年）

宇良部山　宇良部岳のこと。与那国島のほぼ中央部にある、標高二三一・二㍍の山。山の北側に租納集落がある。山は山頂域から急に低くなり、東西に百㍍台の山麓部を形成する。

八時半、宿を出て役場に向う。租納部落は今まで廻った離島と相違して多くの商店が目に入った。主として雑貨商らしい。理髪店もあった。

役場に着くと、今日は在郷軍人が全員集合して訓練を始めるので、一言訓示が欲しいと云う事になり、早速、大戦の現況から見る与那国の重要性を沈まざる大航空母艦として在郷軍人の指令を話した。

村長不在の為、助役から種々聴取し、島の視察の案内に勧業課の生盛氏を依頼して十字役場を出発した。

島の北岸伝いに久部良に通ずる道を歩く。珊瑚礁の歩きにくい道路が続く。暫くして龍舌欄の立ち並ぶ道路に入ると、一面に芝生の柔らかな路面となり、アダンが繁茂してどこまでも続いている。龍舌欄の花というよりも木が我々には非常に珍しく感じがする。

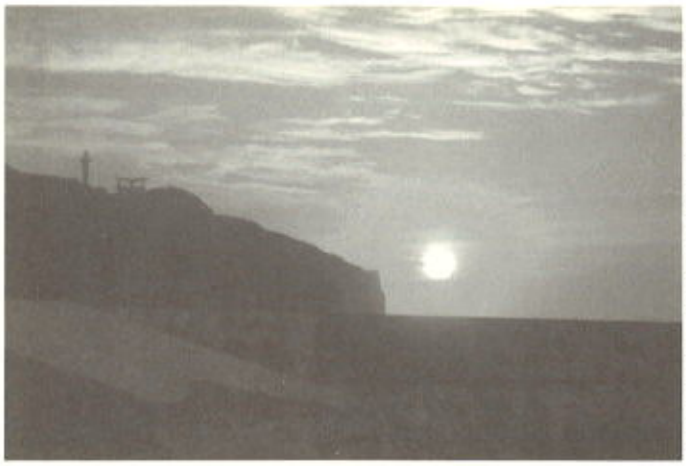
その上、暫く行くと草原に出た。牧場で、丁度洋画に出るカウボーイが馬を馳せる情景そっくりの景色が展開して、一層その感を深くするのである。到底内地では眺められぬ景色である。又、牧場に通ずる道には、丸太で組んだ垣があって、ここを通るにはその垣を押し開いて通ることになる。

一群の馬の群れが小馬を終えて草を食んでいる。又、牛、山羊、の群れが草原に遊んでいる。広々とした牧場の彼方には黒い海が正午に近い太陽を受けて鈍く光っていた。

燃えながら不時着したという飛行機の無惨な焼け跡を通り、この村営の牧場を通し、遠く西の久部良岳の山裾まで続く雄大な土地を暫く驚きの目を見張った。原野に続く牧場と耕地は、単なる大海に浮ぶ小島の感を払拭した雄大な大地である。然し、北岸は十数丈の断崖をなしている。手をかければ要害な飛行場となる。不沈空母として守り抜かぬ限り、一度敵の手に移れば要害の基地化となるだろう。

まだ、多くの原野をなし奇妙な突出する所に出たが、眼下を久部良の部落を見ると、宿に引き返すことを断念して久部良行きを決心した。近道を探して断崖を覗いて歩いたが果たさ

龍舌欄　リュウゼツラン科の常緑多年草。葉は根元から叢生し、長さ一㍍～二㍍、剣状で肉が厚く、刺がある。高さ七㍍～八㍍の花茎を伸ばし、黄緑色の花を円錐状に付けて咲く。



夕陽に映える与那国島の西崎（平成12年）

ず、漸く下りた所に桃原という小部落があった。芋畑に一人の老人が居た。生盛氏が指図したであろうか、仮小屋のような家に案内され、「休憩せよ」と云う。

掘立小屋とはこんあ家であろうか。それでも葦で編んだ莫蓙を出してくれて、立派な茶器（家に似合わぬ）で茶を出してくれた。更に黄西瓜を切ってくれたが、汗を流した長途の歩行の後で格別美味しかった。

想わぬ休憩に元気が出て、久部良に出発したのは十二時であった。ユウナと芭蕉の林を通り抜けて元来た道路に戻ったが、そこからは三間中の立派な道が構築されている。聞けば村中総作業を二十三日継続して四粁を造ったものである。

久部良の部落は三府四十三県の人が集まったような町で、先程の老人も夫婦二人だけ、沖縄本島那覇から移り住んでいるとの話である。

すぐ近くに見えた久部良へは、この道を延々と歩かねばならなかった。途中、「久部良割り」と称する場所に案内された。海に面した珊瑚礁の隆起した断崖の上に一面芝生が生い茂った綺麗な所であるが、礁の破れ目があって、その下には波が打ち寄せている。

その昔、人頭税に苦しんだ頃、人口制限をした一手段の場所である。礁の割れ目を妊婦に命じて飛び越えさせる。大抵の妊婦は向う岸に飛べずに割れ目に落下し惨死する。これが人口制限の一方法とされたと伝えられている。

私は試みに飛び越えてみよう、と思い軍刀だけ田中上等兵に預け、長靴が滑ることのないように注意して反動をつけて飛んだが、これでは妊婦には無理である。この割れ目の底が海に通じ、海賊の宝庫と云う伝説もあったので、先年、生盛氏が人と協力して掘ったが、多くの人骨が出て来たので中止したと説明された。

此の他、人桝田*の伝説、三人の台等の話を聞かされたが、孤島の昔の生活の一端を窺い知ることが出来た。

久部良部落に入って案内された家は「発田」という鰹節工場主の家で、一間幅の廊下を持った立派な台湾桧建築の内部は全く内地の高級家屋と変りなかった。宮崎県出身で台湾にも

人頭税時代の悲しい伝説の残る久部良割り（昭和18年）

人桝田　一般的にトゥングダと呼ばれる。与那国島の旧島仲村の南側にある凡そ一町歩の天水田。島の伝承によると、人頭税の重圧から逃れるため、一五歳～五〇歳までの男子を、この場所に召集し、遅れてその田の中に入れなかった者を惨殺した、といわれる。

石垣にも工場を持ち、手秘録鰹漁を営んでいると云う。

此の家の番頭さんであろうか、芭蕉布の服を着て応対され、部落快調と話している内に、「昼食をどうぞ」と案内された。恰も待ち受けていてくれたように早い食事に、此の家の女主人が現れた。

「主人は今日、村会があって租納に参りました。船頭に聞きますと、今日は久部良に来られるとの事でしたので」と挨拶された。

道理で早く準備が出来た筈である。それにしても船頭とは誰だろう、と思い尋ねると日向丸は発田氏の所有で、船頭付で軍に借り上げられている事が知らされた。租納入港してから直ぐ久部良港に廻送されていたのであった。

温かいご飯、鰹の刺身、豚肉の野蒜煮、玉子焼き等、珍味が豊富に出された。その上、若い綺麗な服を身に着けた滝刺とした肉体を慎ましく覆った娘さんが給仕に出られた。此の家の主人の妹さんが、女主人の妹さんが遂に聞きそびれてしまった。

出発の準備が出来たと知らされて外に出ると、馬が準備されてあった。馬と云っても驢馬に似た小馬である。大変有難いことだ。この炎天の下、馬で行けることは何より嬉しいことである。

その上、この家の女主人は、「租納も宜しいが、久部良の方が町らしいし、船出も便利だから是非戻って来てこちらで滞在するよう」と誠に有難い挨拶に感謝のお礼を述べて出発したのは既に午後の三時であった。

細い山伝いの道も、険しい道も元気よく馬は歩く。久部良岳の麓を通って鬚川部落へ通ずる山道であるが、馬のお陰で楽に走ることが出来た。然し、谷川のような石ころの凹凸の下り坂も同じように走るから、止めようとも止まらず、馬も止めようがなかったのか、前のめりにフッ飛ばされそうになることも度々である。

その道に牛が遊んでいて、下手な乗馬をあざ笑うかの如く我等を迎えては見送っていたが良い心地ではなかった。

鬚川部落　与那国島の南部にある現在の比川部落のこと。集落の中央を流れていた川がナータ浜に注ぎ、その様が長い鬚に似ていたことから名付けられたと言われる。当初久部良集落の北側にあったが、後に上里に移り、さらに現在地に移動した、という。『宮古八重山両島絵図帳』にはひけ川村とある。三間切制に移行した一六二八年（崇禎元）には与那国島は大浜間切与那国村となり、鬚川村は見えない。その後、一七三七年（乾隆二）の調査報告によると、与那国のうち鬚川村として男女四〇人、村番所は租納村の南方三四町三六間にある、と記す。小学校があり、集落の前には美しい比川浜、さらに西方にカタバル浜、東方にウバマ浜が広がる。

*騺川湾は与那国南岸の唯一の港のように思われたが、湾内は珊瑚礁で所々刳舟が通うに過ぎないことが分かった。騺川部落を素通りして険阻な山道が続き、不時着機の残骸のある剣阻鼻上の台地を見たが、馬は元気に全身汗まみれになっても平気である。

租納に戻り、引続いて租納東方の地を見た。幅六〇〇米、長さ千米にも及ぶ広い耕地(畑)が開けていた。その耕地を抜けると、アダンの茂みを通り、浜に近い基地がある。在郷軍人、女子防護団が芝生の一面に生えた広場で訓練をしていたので、馬を止めて暫く見てから宿舎に帰ることにした。

行程、歩行三里、馬三里。馬、人とも汗まみれになったので、入浴せんと思いしに、「今日は風呂はありません」と残念であった。

日中の行事と馴れぬ小馬で疲労を覚え、夕食を軽く済まして、床に就くことにした。田中上等兵は馬が初めてであったので、走る馬から振り落とされぬよう、必死だったと云う。殊に最後の墓地で走る馬の鐙を踏み切った時は落馬必至であったが、島中の青年男女の見ている前で落馬しては西表の兵隊さんが落馬したという不名誉が残ると、それこそ必死に頑張ったと話していた。

やがて牧場に夕日が落ちて
島の名勝　険阻の鼻に
いつしか更けゆく　更けゆく島の夜

六月十日（木）曇後雨

今日は午前中に島を一周したいと伝えてあったので、海路如何と問い合せた処、「相当荒れますが」という返事だったので、波に自信を持って決行することにした。島の周囲七里。

租納を出港して北岸はさほど感じなかったが、東崎の断崖を廻れば俄然、山なす波が岸壁に砕けて逆巻く怒涛は世界が変った感じであった。波の頂きに乗った瞬間、急転直下、谷底

騺川湾　現在の比川部落の前に広がる入江のこと。

勇壮な海岸線が延びる与那国島の東部、東崎が見える（平成12年）

に落下し続く波の真中に突っ込んでは海中を潜って外に出る。

これでは到底船を沖に進めても、横に進むことは不可能である。ガソリン缶が船上を転げ廻っている。何とかしなければ缶は波に掠われてしまうだろう。船員は船にしがみ付いて離れない。一寸でも手を離せば怒涛の中に吸い込まれてゆくだろう。

ローリング、ピッチングの言葉は通用しない。波に翻弄されている木の葉同然である。この時、船長の怒号と共に舵を捨てて、ガソリン缶に飛び付き頑丈なロープで括り付けた。その間、僅かである。舵を離されては大変である。さすが馴れた船長で、機を見て出たのであろう。

この状況では引き返すより方法はないのであろうと内心諦めた。然し、引き返すにも、どうしても船首を廻さねばならない。その廻す瞬間にも横波を食っては最後である。船長も仕方ないと思ったのであろか。船を沖へ沖へ進めている。

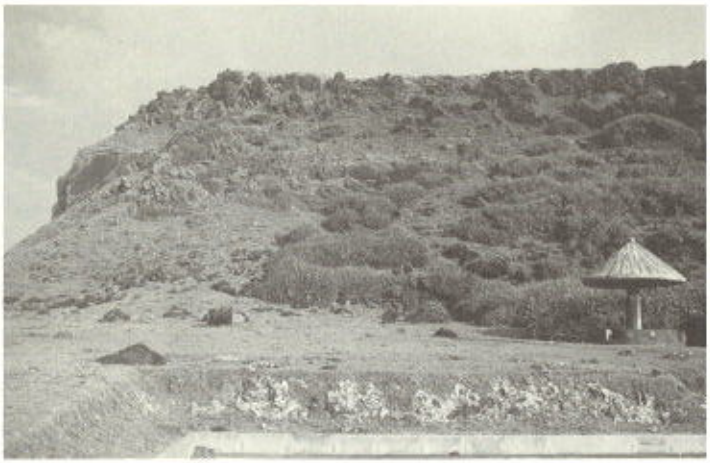
その内、うまく谷間を縫って船首を西へ向けては横波を巧みに避けていた。再び感心して後ろを振り返ってみたが、岸壁から一丁も進んでいないのであった。

艇船さえ出ていない。この大海に誰も見ている人は無い。難破しても万が一、助かることはないだろう。船もろ共岸壁に叩き付けられるのではなかろうか。密かに調査資料と秘地図を体内に縛り付けた。いざの場合岸に叩き付けれぬよう沖へ泳ぐことだ。ひょっとすると、海軍望楼から見ていてくれるかも知れない。

鱶が来れば運命と諦めるのだ。命ある限り沖へ泳ごう。幾度か身を引き締める中を船は西へ西へ進められた。然し、新川鼻の突角は一層烈しいものであった。

漸く難所を逃れ、カモメの群れが海を圧するかのような、その下を通る時は生きた心地である。カモメさえ友である、心強さであろうか。

波が断崖に打ち上げて、白い無数の柱をなす樽舞の海岸を通り抜けると、久部良が近くなる。西北に面する海は、嘘のように静かである。あの怒涛さえ消え去って、夢のようであった。久部良湾を一廻りして一路、北岸を租納の港に急いだ。



急峻な台地の与那国島の東崎（平成12年）

誰も言葉を交わさず、ホッとした気分だけが漂っていた。出港してから帰港まで、二時間四十五分であった。

午後一時、生盛氏が来てくれたので、宇良部山の海軍望楼を案内して貰うことにした。案じていた雨が降り始め、止みそうな気配がない。標高二三一米の山であるが、上り坂は急峻な悪路である。馬も登ることが出来ない。此の道は部落の勤労奉仕で造ったものであるが、側溝（排水路）が無いので、雨降れば水路となり、道路が益々水の為に掘れて石コロの谷となり、歩行には益々困難となる。

雨は本降りとなった。山の中腹で立ち止まって麓を見下ろした。

宇良部ふもとの水田の稲は
島の乙女の晴にのびて
年にお米が年にお米が二度採れる

という小唄のように山麓水田が開けていて、稲がよく実っているのが見渡すことが出来る。

汗と雨でずぶ濡れとなって、頂上の望楼に着いた時は、一層雲の勢いが強くなった。ピンポンをしていた海軍の人達は我々の姿を見て、上衣を着て出迎えてくれた。

此の望楼の長が以外や、中川尹氏で先日迄西表崎山見張所に勤務された人で、一度面識の人であった。「やあ、何日こちらへお越しですか」と挨拶抜きの最初の私の言葉であった。

真新しいシャツを出してくれたり、体を拭いたり、まるで我家へ戻ったような気分の中で泡盛ですき焼きの馳走になってしまった。

「今朝からはまた烈しい荒海の中を、上から見ていてよく船が進んだもの、と海の我々さえ陸さん（陸軍のこと）の勇敢に驚いていました」と云われて、「やっぱり見ていてくれたのですか」と思っていました、話が進む内に見張所の面白い話を語ってくれた。その二つ。

一、此の島で遺骨を迎える時、朝から海岸で待つ。待ち続けて果たさぬ時が屢々ある。先日も「船が見えたぞ」と知らした。船は鳩間水道に見えたので、村人は浜に待つこと八時間。それ以後は近くまで来るまで村に知らさない事にしている。

海軍望楼　沖縄方面根拠地隊所属の監視哨のこと。与那国見張所と称し、電波探知機を備えて、沖縄方面根拠地隊と無線で連絡を取り合った。一九四四年（昭和一九）には平石良一兵曹長以下、一五人が守備に当った。

ティンダバナから眺めた租納集落。ナンタ浜には護岸が…（平成12年）

二、八日の朝、軍の船が見えたと、二時間前に知らせたので、そら点呼執行官だと大騒ぎの召集となった。私達は西表の将校1、兵1と見ていたのだが、村人は早合点をした。以上な訳で、私達の行動の全てがキャッチされていたのであった。

待てども雨止まず、雨中下山を決行した。下りは殆ど駆け足で宿まで四十五分を要しただけだった。全身濡れネズミとなり　早速着替えをして入浴を希望したが、今日も風呂はなかった。

潮風呂でもよいからと頼んでみたが、返事の無いままであった。贅沢は望まぬが、こんな宿も滅多に無いことだろう。

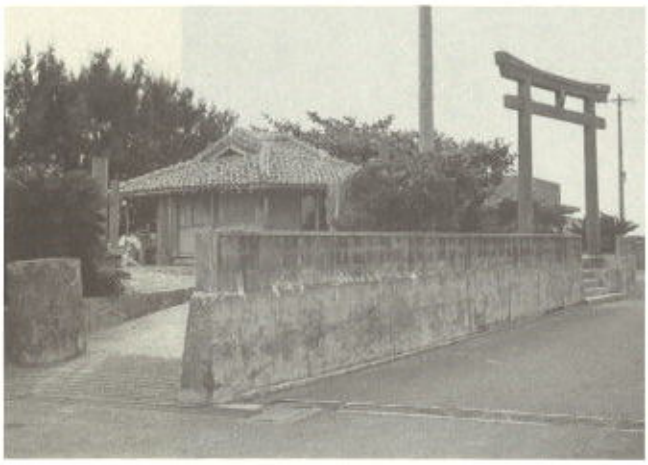
今日で概ねの目的も果たした。早々帰隊したい、と思い乍ら今夜にも夜の町を散歩しておかなければと思ったが、雨益々烈しくなって来たので諦めて、九時頃から寝床に入ったが、連日の疲労もあってか、グッスリと寝てしまった。

六月十一日（金）雨

最悪の天候となった。雨は止まず、風は北に移り、態々数日の滞在を覚悟しなければならない。雨の小止みの間にナンタ浜に出てみたが、高波が防波堤を飛び越えている。石垣との連絡船、昌福丸は早暁出港したが、危険な為、久部良港へ帰ったと云う。租納港は北風になれば出港出来ぬというので、土地の人は非常に不便をしているという事である。

状況に明るい日向丸は、昨日の内に久部良港へ回航してあったので、心配はなかった。何もすることがなく、汚い莫蓙に座ってタバコを吹かす。そのタバコも今日は一日でおしまいだ。

北風に荒れるナンタの浜白し
今日は船出を待つ退屈魚
門影の真紅の鼻の色鳴らし



豊年祭で、島の住民が集う十山神社（平成12年）

目に沁みいりぬ　旅の仮宿

「基盤を借りて来ます」と田中が部屋を出て大分時間が経った頃、十五、六才の可愛い娘さんが頭に碁盤を載せ、その上に碁石まで置いて運んで来た。一寸誰にも出来る芸当ではない。聞けば雨の中、巡査の家から運んで来たそうである。

碁は田中の方が上である。残念ながら黒を持って対局しなければならぬ。

突然、発田氏が顔を見せて、

「船をこちらへ廻すと、此の風では二、三日も、悪くすれば五、六日も出港出来ませんから私の家へ来て下さい。こちらより久部良の方が漁夫が多いから天候もよく見、便利ですから」と親切に言葉を残すと去って行った。

三十五、六歳かと思われる小柄であるが、元気そうな好漢であった。海やけして色も浅黒く、島の人としか見えない。此の雨の中を訪ねてくれた親切に対し、感謝の気持ちが一杯である。

在郷軍人会長の小橋川氏が来訪して、「今夜、村長が色々お話を交わし度いから」と招待があった。

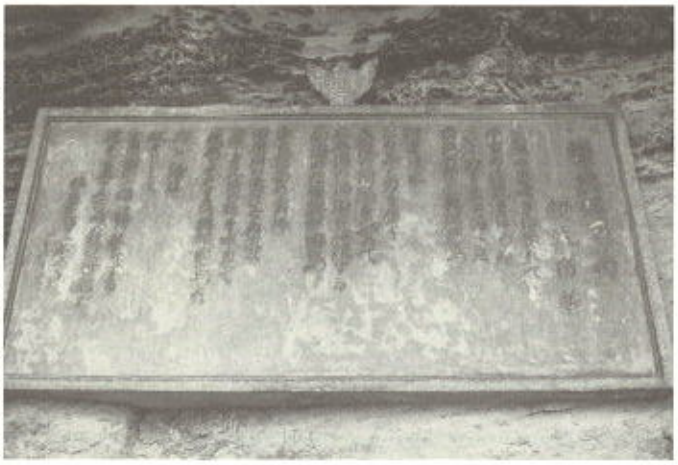
仲盛嘉尚村長は医者で老年であるが、識見のある立派な人であった。集まった人は、生盛氏、小橋川氏、村助役で雑談に花が咲いた。その内在郷軍人の会合の席で私が話した中に、与那国島は「沈まざる大航空母艦」だと云うことに触れて来た。

過般、来島した伊波南哲氏が書かれた詩がケンザ鼻に残されていて、その中に「沈まざる二十五万屯の航空母艦」と書かれてあると云う。偶然の一致であるが、意義深く感銘を深くしたとの一同の話であった。

村長はなかなか酒も強く、途中一同往診されたが、老練で話術にも長けている。早く辞去しようとしたが、こんな機会は滅多に無いと引き止められ、思わず長居をしてしまった。我々には特に日本酒が準備されていた。

二十四時漸く辞去して宿に戻り、昨日買ってあったサイダー一本を分け合って飲んだ味は

ケンザ鼻　天蛇鼻（ティンダバナ）のこと。祖納集落の南方にある、標高百㍍の断崖状の自然展望台。



ティンダバナにある、詩人の伊波南哲が戦時中に書いた「讃・与那国島」の歌碑（平成12年）

誠に醍醐味とはこのことか。

六月十二日（土）雨

雨は降り続き、北風も止みそうにない。ナンタ浜は荒れ狂っている。こんな天気では久部良行きも駄目だと思っていると、「発田から乗りました」と馬を挽いて三十四、五歳の頑丈な男がやって来た。

実に礼儀正しく、慇懃で遠慮深い男性で、「先生は馬に乗って下さい」と俄に「先生」になってしまった。「この雨ではどうにもならぬ」と躊躇していると、船長、機関手と船員の三人がやって来て、荷物は私達が持つから、と急立てられた。せめて昼食でも宿で共にしよう、と云ったが、発田氏の教育よろしくと、なかなか承知しそうにもなかった。

自分だけ馬に乗ることは非常に心苦しかったが、勧められるまま出発したが、迎えの人達は合羽もなく、帽子もつけず、雨に打たれてながら、どんどん進めて行った。久部良まで八粁。雨は益々、烈しくマントを通して腰から下は肌に染み通って来た。皆な雨に打たれながら黙々と歩いている。

例の馬を挽く男だけは、雨は自分の責任であるかの如く、「雨の中は誠に済まない」「馬が小さくて申し訳ない」「道が悪くて」と盛んに恐縮しながら話し掛けて来る。生まれは租納だが、発田さんに世話になっていると云う。実に純朴な人だ。

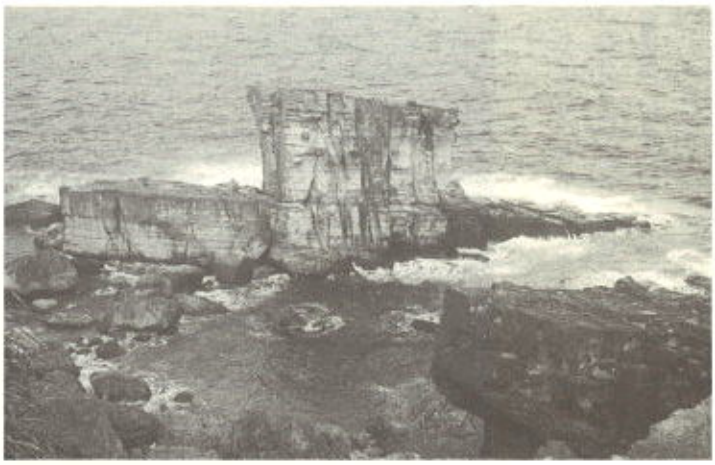
男「此の島はみんな小馬です。この小馬は昔、カミゲンという所から来たそうで、カミゲンには立派な馬が沢山居るそうです」

私「カミゲンて何処かネ」

男「台湾から一昼夜半で行けます。今は日本の領地ですが、この間までは外国でした」

私「カミゲンでどんな字」

男「カミは神様の神で、ゲンは知りません。カミゲン丸という船がありますが、海南島の



海中に屹立する軍艦岩（平成12年）

近くじゃないんですか」

私「台湾から一昼夜で行ける所とは、船の速力にもよるが、フィリピンか支那だよ。神の字が付くような所はないように思うが」

男「支那ではありません。前は外国で、今は日本です。発田さんがよく知っていますから聞いて下さい」

その他、黒糖の製造等の話を聞かせてくれた間に久部良に着いた。見るも無惨に濡れてしまった。

タイル張りの実に感じの良い風呂であった。与那国に着いた夜、宿で潮風呂に入ってから待望の入浴なので、浴衣に着替えた気分は又格別である。

発田氏夫妻に挨拶してから、カミゲンの話をすると、ルソン島の北にカミグィンと云う小さな島があって、漁夫達はカミゲンと呼んでいるという事だった。海図を出して来て、見せてくれたが、成る程、Ｃａｍｉｇｕｉｎｅと書いた小さな島があった。此の付近は鰹が夥しくとれるそうである。

以前（油の自由に入手できる頃）はよく出漁し、台湾の工場で鰹節を作り、一ケ月の収穫は与那国の収穫の二年分ほどだと云う。然し、今は台湾でも鰹節は姿を消してしまったという。

発田氏は男三人兄弟の末弟で、この与那国の本宅に在り、兄二人は台湾と石垣に夫々営業所を持っている。氏は当年、三十二才で第一乙種、まだ一回の召集もない。子供六人の中、男が一人で夫人はまだ三十才位である。

村に水道を造ったり、学校建築をしたり、学校の先生住宅を造ったり、独力で社会奉仕に努力されている様子が窺われる。台湾との交通もあるので、日本酒を準備されていた。

久部良国民学校校長、那根先生が来訪された。どこかでお目にかかった人だと思ったら、以前、石垣に勤務され、児童をつれて慰問に来訪された、と云うことであった。男の先生三名、女の先生五名と児童数名。外に女子青年団の方が十名ばかり来られて、遊戯や手踊りを

サンニヌ台近くの海岸線（平成12年）

披露され、思わぬ歓待に会った。

恐縮してお礼を述べると、「児童や若い先生は、又村の乙女達は兵隊さんの前で演技するのが大変嬉しいのです」と校長の挨拶であった。

発田氏は蓄音機*を持ち出して来て、「大東亜戦争十年史」という十二枚の続きのレコードをかけてくれた。

初めて聞く大戦宣戦の日の録音！　続く快勝記録ニュース。当時、内地の感激の様相。大戦前に応召して孤島生活をして来た私達には全く貴重なニュースであった。

夜は既に午前一時になっていた。

「昨日から来て頂いていたら」

「滞在を久部良でして頂いていたら」

と親切な皆様の言葉を身に染みて感受しながら、皆は発田家を去って行った。

いつの間にか雨は止み、綺麗な星空が開けていた。

「明日は申し分のない天気です」

波止場の方で、この綺麗な星空を讃えるかの如くハーモニカの音が静かな波音と共に聞こえて来た。

実に気持ちの良い寝床が準備されてあった。こんな寝床に眠るのも今宵限りであろう。与那国はやはり佳い島であった。開け散った雨戸を通して、先程のハーモニカが聞こえて来る。眠りを誘う子守歌のように。

六月十三日（日）

日向丸の船員が大声で叫びながら起こしに来た。まだ目が覚めていないので、「出発は九時だから急ぐな」と云うと、「早く出発した方が良いのです」と云うので、「何故だ」と聞くと、「魚を釣って土産物を作りますから」と云う。「土産の魚のために急ぐ必要はない」

蓄音機　円盤レコードの溝に針を接触させ、録音した音を再生する装置。回転台、ピックアップ、サウンドボックスから成る。

島の若者が、この岩で助けられた伝説の残る立神岩（平成12年）

と云ったが、一度目を覚まされると、眠れそうもないので起きた。七時であった。

綺麗に気持ち良く晴れた朝で、台湾がクッキリと見ることが出来た。発田氏も、「こんな明瞭に見えることは珍しいのです」と語っていた。

田中に命じて鰹節を二十斤買って貰ったら、斤当たり相場二円九十銭のものを二円しか受け取ってくれないので、厚意に甘えておいた。

日向丸は船長共発田氏の所有である為、その性能もよく承知している。「この調子では西表には早く帰れますよ」と発田家一族の方に、学校長を初め先生方が浜に整列して見送って下さった。桟橋から伝馬船に乗り、日向丸に移ったのが九時であった。

白いハンカチや手を振っている見送りの人々に厚い感謝の意を込めて、船を一回転して離れたが、西崎の突端に消えるまで白いハンカチが振られていた。

女護の島と云い、情熱の島と云う、ほのかな感情は宿舎の四泊で完全に消え去った、漠然とした気持ちが発田氏宅の暖かい雰囲気が吹き飛ばしてくれたのだろうか。

一昨夜、村長宅で誰かが云っていた。「此の島で電灯とラジオがあれば、日本一住み良い島だ」「外から来た人は、絶海の孤島に淋しく生活することを驚かれるだろうが、気候よし衣食住整い、こんな良い所はない」と云っていた事を想い出す。

此の島の若い男女は、今も美しい月の夜、又星の明るい夜などは浜辺の青い芝生の上に寄り添いながら、心地よい南風に甘い青春の歌を歌い合うそうである。

現在の人口四七八二名で、女性は二〇一一名多数を占めているのも昔の名残であろうか。最近は県外移住が禁じられているので、台湾を目前にしながら移住も出来ず、島は島の人達によって構成してゆくことになっている。

台湾貨幣が流通しているのも、交通頻繁を物語っているが、それが幸いして島の衣料切符は殆ど使用の必要が無いそうである。近代化の島の生活と共に、昔の伝統や習慣は置き去りになり勝ちである。忘れたくない文化、習俗、信仰、制度などは貴重な民族史として残ることを願いたいものである。

衣料切符　太平洋戦争開戦直後の一九四二年（昭和一七）一月、「食塩通帳配給制」「ガス使用量割当制」が実施、二月には「味噌醤油切符制」、続いて「衣料品」に点数切符制が実施され、一人あたり一年の「点数」は都市一〇〇点、郡部八〇点に限られた。そこに「衣料切符早分り」という三つ折りになった絵入りの一覧表が登場した。同表は毛編糸一オンス一点から始まり、帯締め、よだれ掛け二点、前掛け、エプロン三点、足袋三点、パンツ五点、ズロース、ブルマー五点、半ズボン下、ステテコ八点運動用パンツ、腹巻八点、カッポー着一〇点、労働作業着、胸当てズボン一二点、長ズボン下、パッチ一五点、作業服三〇点、婦人スーツ三五点、国民服四〇点、婦人外套五〇点、背広、モーニング六三点などとなっていた。

波にぽっかり浮く与那国は
島は良い島　無尽の宝庫
歌と情けの　歌と情けのパラダイス

西崎を廻れば島の南岸である。三十分程経過した頃、二本流してある釣り糸に釣れるわ、釣れるわ、大きな鰹の群れの中を航行しているのであった。

進路方向に嵐を孕む雲の群れがある。船はその真っ只中へ突進している。船室に入り、仰臥すれば風雨の烈しさが背中に強く伝わってくる。

熟睡したであろう。目覚めて船上に出ると、雨は止んで西空は晴れ渡り、その明るい空の下に小さく、微かに与那国島が浮んで見えた。随分と走ったものである。時計は十三時を指していた。丁度、与那国と西表の中間に位置しているのであろう。

なだらかな大きな山のような波で、谷底から頂上へ、頂上から谷底へと緩やかなローリングを繰り返して進んでいた。

「船長、航路が違うぞ！えらい遠回りじゃないか？」と云えば、「仲ノ神島には鳥の卵が無数にあります。船は着けられませんが、泳いで行けます。付近は鰹の巣なんです」と云っている。

朝から急いだのは、この目的のためだったらしい。皆はよく寝入っている。丁度、その時引き網に大きいのが釣れた。船長一人では無理だと思ったので、頼りないが舵を預かった。一米以上もある「まんびき」という魚であった。鮭のような姿をしていた。

又、嵐が近付いて来た。一と荒れ来そうである。「船長、どうする？」と云えば、「直ぐ帰らなければなりませんか？」と残念そうな顔をするので、気の毒になり「任す。寄って行け」と云うと、「神島からは追手ですから、全力を出せば二時間半で帰れますから」と嬉しそうであった。まだ、目的地までは遠い。嵐を避けて船室に入る。

外部が騒々しくなったので顔を出せば、鰹の群れに入ったのであろう。小型ながらもどんどん釣れている。降りしきる雨の中、高波の飛沫を浴び、幾度か洗い去られそうな船尾に全

海鳥の舞う仲ノ神島（昭和40年）

まんびき　シイラのこと。全長約一・五㍍。体は細長く、著しく側扁し、雄は前額が大きく隆起している。体色は青緑色で、瑠璃色の小点が散在する。

身を投げ打って釣り続けている。神島のそそり立つ岩壁の周囲を、荒れ狂う波の中を巡っていたのである。

大漁に満足したのであろう、全速力で帰路に着く。崎山を過ぎ、サバ崎を過ぎ、外離の監視哨を遥かに眺めて、船浮湾に差し掛った頃は、先程来の嵐も消えてカラリと晴れ渡っていた。十八時安着。朝九時乗船して、昼食をとらず、飲まず、食わずの九時間であった。

指令を果たして無事帰着出来たことを、当然のことのように感じている自分の心境を想って得意勝手な我を痛感した。当番兵に食事を作って貰って、浜からすぐの鰹の刺身で昼夕兼用の食事を田中と共にした。

「おかげで良い思い出が出来ました」と田中上等兵の言葉だった。残して置いた〝さくら〟を出して、我が板間の三畳の部屋に寝転びながら吹かす煙草の味で、改めて無事でよかったと心の中で叫んだ。目をつむると、大波に揺れる船上にあるが如く、揺れ動く感じが去らない。

孤舟に身を託して南海の離島を巡る。その他、地誌、風俗、人情に接し、又悉さに之れを探る。時戦中にあり、銃後の護り、その熱きを身に染みて感ず。島の平和な生活の破れざらん事を切に祈る。

軍事上の資料は之れを別とするも、茲に孤島を巡りて、旅の想いと土地の人情を誌す。後日、之れを「想い出の記」として読む機会があらば、と思い拙文を記す。陣中忽忙の間、文字の誤り、文の続きも成さず、遺憾と思えど之れ又戦中の想い出ならん。

上空から見た西表島南西部。手前に外離島、寄り添うように内離島、そして突き出たサバ崎、遠くにヌパンの浜、パイミ崎が見える（昭和63年頃）

収蔵図書紹介

受贈図書紹介

多数の個人、関係機関等から寄贈を受けております。あわせてお礼申し上げます。

寄贈者御芳名	受贈図書名
与那原町役場	与那原町制施行50周年記念写真集『よなばる今・昔』
浦添市文化協会	うらそえ文芸　創刊号
浦添市文化協会	うらそえ文芸　第2号
浦添市文化協会	うらそえ文芸　第3号
浦添市文化協会	うらそえ文芸　第4号記念
浦添市文化協会	うらそえ文芸　第5号
沖縄県教育委員会	史料編集室紀要　第25号
嘉手納町教育委員会	嘉手納町史資料編5　戦時資料（上）
徳田球一顕彰記念事業期成会	記念誌『徳田球一』
沖縄県教育委員会	沖縄県史研究叢書8
	沖縄毎日新聞見出集（下）大正2年～3年
沖縄県教育委員会	沖縄県史研究叢書9
	沖縄考古関係文献目録（暫定）
与那原町教育委員会	『奥山の牡丹―沖縄歌劇の巨星・伊良波尹吉物語一』
南風原町史編集委員会	南風原町史第4巻自然・地理本編『南風原の自然と地理』
豊見城村教育委員会	豊見城村の文化財　（付録第12集）
浦添市教育委員会	浦添市立図書館紀要　No.11
沖縄市役所	『KOZA BUNKA BOX』第2号
具志川市教育委員会	具志川市史だより　第15号
ひめゆり平和祈念資料館	感想文集『ひめゆり』第11号
ひめゆり平和祈念資料館	『資料館だより』第25号
ひめゆり平和祈念資料館	『館報』第11号
ひめゆり平和祈念資料館	ひめゆり平和祈念資料館開館10周年記念『沖縄戦の全学徒たち』展　報告書
沖縄県史料編集室	沖縄県史資料編10遺跡総覧（先史時代）考古1
九州大学	九州大学海外学術調査委員会学術報告第2号八重山群島学術調査報告第2集（コピー）
竹富博彬	『柳姓六世康平世系家譜』（コピー）
青井志津	『石垣島、死者の正月』
沖縄学研究所	沖縄学研究所紀要　第4号
国立歴史民俗博物館	環境に関する民俗的認識と民俗技術的適応
鳩間小中学校	学校沿革概要（コピー）
平良市総合博物館	平良市総合博物館紀要　第7号

首里城公園管理センター	首里城公園ガイドブック
沖縄県史料編集室	歴代寶案　校訂本第12冊
平良市総合博物館	平良市総合博物館紀要　第1号
平良市総合博物館	平良市総合博物館紀要　第2号
平良市総合博物館	平良市総合博物館紀要　第3号
㈳沖縄建設弘済会	建設情報誌『しまたてい』創刊号
㈳沖縄建設弘済会	建設情報誌『しまたてい』第2号
㈳沖縄建設弘済会	建設情報誌『しまたてい』第3号
㈳沖縄建設弘済会	建設情報誌『しまたてい』第4号
㈳沖縄建設弘済会	建設情報誌『しまたてい』第5号
㈳沖縄建設弘済会	建設情報誌『しまたてい』第6号
㈳沖縄建設弘済会	建設情報誌『しまたてい』第7号
㈳沖縄建設弘済会	建設情報誌『しまたてい』第8号
㈳沖縄建設弘済会	建設情報誌『しまたてい』第9号
㈳沖縄建設弘済会	建設情報誌『しまたてい』第10号
㈳沖縄建設弘済会	建設情報誌『しまたてい』第11号
㈳沖縄建設弘済会	建設情報誌『しまたてい』第12号
㈳沖縄建設弘済会	建設情報誌『しまたてい』第13号
竹富町教育委員会	『竹富町古謡集』（第3集）
ボーダーインク	『おきなわ行事イベントの本』
沖縄県教育委員会	『沖縄の歴史と文化 THE HISTORY AND CULTURE OF OKINAWA』
浦添市教育委員会	『琉球王国評定所文書』第15巻
西大舛　高　老	『新城上地島の古謡と祭祀』
登野原　武	八重山、竹富町調査報告書（1）
沖縄国際大学南島文化研究所	地域研究シリーズNo27
沖縄国際大学南島文化研究所	八重山、竹富町調査報告書（1）
宍道町役場	地域研究シリーズNo28
沖縄国際大学南島文化研究所	『宍道町史　史料編』
新井　潔	多良間島調査報告書（4）
竹富町議会	地域研究シリーズNo22
竹富町議会	『竹富島玻座間村の狂言』
八重山毎日新聞社	平成12年竹富町議会会議録（第1回・第2回）
名護市史編纂室	平成12年竹富町議会会議録（第3回）
粟国村教育委員会	『八重山毎日新聞五十年史』
沖縄県公文書館	『5000年の記憶　名護市民の歴史と文化』
沖縄県公文書館	粟国島の民話
沖縄県公文書館	沖縄県公文書館開館五周年記念特別展 琉球王表文泰本展展示図録
沖縄県公文書館	沖縄県公文書館開館五周年記念特別展 琉球王表文泰本展展示図録（別冊）
石垣市史編集室	開館五周年記念　五年の歩み
沖縄大学地域研究所	『石垣市史　八重山史料集2　豊川家文書I』
沖縄大学地域研究所	沖縄大学地域研究所　所報No21
那覇市教育委員会	那覇市文化財調査報告書第44集
	『ナーチュー毛古墓群』

南山舎	シリーズ・八重山に立つNo2『八重山を読む　島々の本の辞典』	
竹富町教育委員会	国指定重要無形文化財　竹富町の文化財第5集『西表島の節祭（干立編）』	
大原中学校創立50周年記念事業期成会	大原中学校創立50周年記念誌『群青』	
沖縄県教育委員会	沖縄県教育委員会、中国第一歴史档案館『交流10周年記念誌』	
沖縄県歴史教育者協議会	『歴史と実践』第21号	
南恩納区字誌編集委員会	『南恩納誌第一巻』議事録復刻版	
宜野湾市教育委員会	『宜野湾市史　第9巻』資料編8自然	
金城善	第22回『沖縄文化協会賞』比嘉春潮賞受賞金城善の主な論考四点』	
石垣市史編集室	『石垣市史のひろば』第24号	
沖縄県立図書館協会	『沖縄県立図書館協会誌』第5号	
ひめゆり平和祈念資料館	ひめゆり平和祈念資料館資料集1『ひめゆりの戦後』	
ひめゆり平和祈念資料館	『資料館だより』第26号	
沖縄国際大学南島文化研究所	沖縄国際大学南島文化研究所紀要『南島文化第』22号	
全国竹富島文化協会	『西塘考』（西里喜行著）『西塘傳』（與那国善三著）復刻版	
沖縄竹富郷友会	『創立50周年記念誌　竹富』	
与那国中学校50周年記念事業期成会	与那国中学校創立50周年記念誌『道程　DOUTEI』	
三木健	ウォーカー博士が見た『沖縄の原風景』	
南風原町史編集委員会	南風原町沖縄戦災調査　12『神里が語る沖縄戦』	
南風原町文化センター	南風原町文化センター紀要　第3号『南風の杜』	
具志川市教育委員会	『具志川市史』第3巻　民話編下　昔話	

購入図書紹介

多数の書籍を購入していますが紙面の都合上その一部を紹介します。

著者名	図書名	発行所名
琉球新報	琉球新報縮刷版平成11年6月号	琉球企画
沖縄タイムス	沖縄タイムス縮刷版平成11年6月号	㈲でいご印刷
沖縄タイムス	沖縄タイムス縮刷版平成11年7月号	㈲でいご印刷
浅井潤子・藤本篤	古文書（判読辞典）	柏書房㈱
安里英子	琉球弧の精神世界	㈱御茶の水書房
比嘉康雄	神々の古層⑨世を漕ぎ寄せる［シチ西表島］	ニライ社
沖縄タイムス	沖縄タイムス縮刷版平成11年8月号	教育図書㈱
沖縄タイムス	沖縄タイムス縮刷版平成11年9月号	㈲でいご印刷
沖縄タイムス	沖縄タイムス縮刷版平成11年10月号	㈲でいご印刷
沖縄タイムス	沖縄タイムス縮刷版平成11年11月号	㈲でいご印刷
安仁屋政昭	沖縄の無産運動	㈱南西印刷
上江洲均	ふるさと沖縄の民具	沖縄コロニー印刷
ジョン・マクロード	アルスト号朝鮮・沖縄航海記	㈱エーヴィスシステムズ
渡邊欣雄	世界の中の沖縄文化	文進印刷㈱
沖縄タイムス	沖縄タイムス縮刷版平成12年1月号	㈲でいご印刷
沖縄タイムス	沖縄タイムス縮刷版平成12年2月号	㈲でいご印刷
編集委員会「沖縄を知る辞典」	沖縄を知る辞典	光写真印刷㈱
原田禹雄	蔡鐸本『中山世譜』現代語訳	㈱エーヴィスシステムズ
原田禹雄	新井白石『南島誌』現代語訳	㈱ミヨシ出版印刷
法政大学沖縄文化研究所	沖縄・八重山の研究	芳山印刷
沖縄タイムス	沖縄タイムス縮刷版平成12年3月号	㈲でいご印刷

業務日誌

◆二〇〇一年（平成一三）

二月一五日
・沖縄県地域史協議会二〇〇〇年度第三回研修会（二月一六日、公文書館）参加及び資料収集のため職員一人出張（二月一八日まで）

二月一九日
・臨時室内会議（課長会議報告）
・県公文書館所蔵写真資料点検

二月二二日
・県公文書館所蔵写真資料収集及び資料保存講演会聴講（二月二四日まで）

二月二六日
・県公文書館所蔵写真資料購入のため、写真点検作業開始

二月二七日
・県公文書館写真資料購入申請書を同館へ送付

三月一日
・行政文書分類整理編纂保存業務、南山舎へ委託

三月六日
・第十一巻資料編「新聞集成Ⅳ」昭和三〇年原稿三校、光文堂印刷㈱へ送付
・第十一巻資料編「新聞集成Ⅳ」総説執筆に着手

三月一九日
・第十一巻資料編「新聞集成Ⅳ」収録記事目次作成に着手

三月二三日
・第十一巻資料編「新聞集成Ⅳ」昭和二二年、二三年、二四年、二五年、二六年、二七年、二八年、二九年原稿四校、光文堂印刷㈱から届く
・行政文書分類整理編纂保存業務、委託業務完了（南山舎）

三月二六日
・第十一巻資料編「新聞集成Ⅳ」年次解説、新聞にみる竹富町関係年表原稿、光文堂印刷㈱から届く

四月一六日
・臨時室内会議（課長会議報告）

四月二四日
・平成一三年度区長会議（平成一三年度事業計画等説明）

五月一日
・『竹富町史』発刊本を委託販売業者へ送付し、委託販売契約を締結

五月七日
・『町史だより』第19号、鳩間及び新城島へ郵送

五月八日
・町史編集室定例会議。五月の業務予定検討
・『町史だより』第19号、西表東部、西表西部、波照間の各出張所へ送付し、各区長への同地区全世帯への配布を依頼

五月九日

・『町史だより』第19号、竹富、黒島の区長へ送付し、両島全世帯への配布を依頼
・八重山地域史協議会二〇〇一年度定期総会通知、石垣市史と与那国町史に発送
・第十一巻資料編『新聞集成Ⅳ』昭和二二年～同二七年原稿第四校、光文堂印刷㈱へ送付

五月一四日
・臨時室内会議（課長会議報告）

五月一五日
・行政文書分類整理編纂保存業務、南山舎へ業務委託

五月一八日
・第十一巻資料編『新聞集成Ⅳ』巻頭、巻末原稿、光文堂印刷㈱へ送付

五月二五日
・八重山地域史協議会二〇〇一年度定期総会、本年度事業計画等を決める

五月二八日
・臨時室内会議（課長会議報告）

五月三一日
・沖縄県地域史協議会二〇〇一年度総会及び第一回研修会（六月一日、具志頭村立歴史民俗資料館）参加並びに近代資料収集

六月一日
・行政文書分類整理編纂保存業務、業務完了（南山舎）

六月四日
・県公文書館所蔵米軍関係写真資料点検及び整理（六月九日まで）

六月五日
・町史編集室定例会議。六月業務予定検討

六月一二日
・臨時室内会議（課長会議報告）

六月二八日
・第二十五回沖縄地区史跡整備市町村協議会大会（六月二九日、祖納）参加のため職員一人出張（一泊二日）

七月二日
・市町村合併に関する地域説明会（石垣市役所会議室）、職員一人参加

七月一〇日
・『町史だより』第20号、編集開始

七月一一日
・『八重山島由来記』（竹原家文書）掲載の竹富町関係地名の抜き出し及び現地名との照合

七月一八日
・第五回ぱいぬ島まつり写真展に向けての展示写真の選定作業

七月二三日
・第十一巻資料編「新聞集成Ⅳ」全原稿最終校正資料、光文堂印刷㈱へ送付

七月二四日
・第五回ぱいぬ島まつり写真展で使用する写真十一枚の引伸しを

カメラの石垣へ依頼

七月二七日

・町史編集委員・里井洋一氏来室。第十巻資料編「近代②」編集発刊に向けて、専門小委員会の審議事項について協議

八月一日

・「鉄田義司日記」補遺、文字入力作業を開始。『町史だより』第20号への掲載を決定

八月六日

・第五回ばいぬ島まつり写真展で使用する写真十九枚の引伸しをカメラの石垣へ依頼

八月九日

・第十一巻資料編「新聞集成Ⅳ」全原稿最終校正及び資料保存講習会「和装製本と保存箱作成」（主催・県公文書館）受講のため、職員一人出張（二泊三日）

八月一五日

・第十巻資料編「近代②」専門小委員会開催に向けて、通知文書発送

・臨時室内会議（課長会議報告）

八月一七日

・第五回ばいぬ島まつり写真展で使用する写真パネル三十枚、カメラの石垣から届く

八月一八日

・第五回ばいぬ島まつり写真展のパンフレット作成

八月二三日

・第五回ばいぬ島まつり写真展の準備のため、西表島大原へ日帰り出張（職員三名）

八月二四日

・第五回ばいぬ島まつり写真展開催（二五日まで）。盛況を極める

八月二七日

第十巻資料編「近代②」専門小委員会に向けて、審議資料を作成

八月二九日

・第十巻資料編「近代②」専門小委員会開催

編集後記

◆『竹富町史だより』第20号を発刊しました。本号は町史資料集①『鉄田義司日記―船浮要塞重砲兵連隊の軌跡』補遺をメインに据えて編集しました。鉄田氏は、先に町史編集室が編集した日記のほかに、昭和十八年六月一日に内離島を出発し、十三日までの間に、波照間、南風見、新城、黒島、古見、小浜、さらに与那国を巡回した兵要地誌調査を「孤島をめぐりて」と題した紀行文を別個に書き残しております。

◆内容は直接、軍事関係には触れていませんが、当時の島々の実態を朧げながら垣間見ることができます。その中でも波照間島での住民の将校に対するもてなし、与那国ではカツオ節工場を営み、当時において豪奢な生活をしていたであろう、発田家の暮らしぶりなどを窺い知ることができます。今後、調査に着手する「島じま」編の資料としても参考になりそうです。本号は、当初、先号に引き続き「學務書類綴りその二」を盛り込む予定でしたが、分量の都合上、次号に編集することにしました。

平成13年9月28日発行

竹富町史だより

第20号

編集発行　竹富町役場町史編集室

沖縄県石垣市美崎町2番地大和ビル2F東

☎ 0 9 8 0 8 － 2 － 9 9 8 5

印　刷　㈲八島印刷